大公　ハ、ハ、ハ！……いや失禮、併し何だかとても愉快な滿足な氣がする。

フレイ　それはさうと、兎に角私は偉大な人間ですよ。

大公　そんな事を信じ切つて居た時代もあつたさ。

フレイ　それを疑ふものは勝利を得た奴等の崇拜者だけですよ。

（舞臺奥からワルツが聞えて來る。）

大公　聽き給へ、いゝワルツぢあないか？あゝ！何もかも萬事播直しが出來たらなあ……！……何もかも元通りになつたらなあ……。だがこの蒼い空、働いて居る給仕、シガーの煙り、そしてコニヤックとワルツは、惡夢が現實であると云ふ事を、そして尙惡夢が伸び廣がつて行くのだと云ふ事を隱す判けには行かない。

（ミツチーが二人の年寄りの男と傍を通りすがる。彼等は笑つたり、おしやべりをしたりして居る。）

大公　待つてくれ、夢ぢあ有るまいな？ありやミツチーだ……ミツチー・ガトルブ。ミツチー！

ミツチー（笑ひ乍ら急に止る。彼を覗き込む。大公は足早に近づく。）　妾の可愛い友達！（彼に接吻する。自分の連れに向つて。）此の方はノルドランドの大公で私の友達よ。御覽なさいよ、妾達こんなに懇意でせう。それなのに貴君方は妾が伯爵夫人だつて事を信じ樣ともしなかつたんだもの。この人達は妾を月並の淫賣扱ひにして居るのよ。

大公　おゝ！（山高帽子上げる。）全くです、ムッシュー、月並の淫賣ですよ。

（男達、笑つて、會釋をし、遠ざかつて行く。）

第一の紳士　あれが大公かい？

第二の紳士　うん。あの人はひどく墮落して、變つて仕舞つたよ。

大公　おい、大統領に氣が付かないのかい、ミツチー？

ミツチー（彼の方を向いて）　あらまあ、フランク、ひよんな處で會つたわね。コニヤックを妾に注文して下さいよ。（坐る）お氣嫌は如何、フランク？

フレイ　どうして此處に來たんだい、ミツチー

ミツチー　何處に居る所があつて？段々に皆が此處にやつて來るわ。妾、面白い話をして上げるわ、貴君。フランクが逃げて仕舞つて、素漢貧野郎のベレンベルグが政權を握つた時には——妾堪らなかつたわ。妾、フランクが可愛い相だつたわ。だつて貴君方二人とも大好きだつたんだもの。ベレンベルグと來たら平凡で、大きな口を開いたり、派手好みなのにも係らず、まる

でおつとせいが逆立ちしたやうで……

大公（笑ひ乍ら）　年寄りで……でぶつちよで……

ミツチー　だけどね、あんた……妾は何だかノルドランドの政府の附きもの見度いになつたのよ。で、妾は云はゞ公向きなあの人を斷る判けに行かなかつたの……ハ、ハ、ハ！……誰か煙草を呉れない？貴君。大統領、あ、有難う。（煙草を飲む。）さう云ふ判けで……淋しかつたわ。おまけに彼奴は燒餅やきなの……えゝ、あのオセロは、どうだと思つて、妾の駁者、それから妾の夫、お終ひには人でなしの豚のペトリツツに迄燒もちを燒くのよ！

太公　面白い事だらけだ、給仕。フイン酒をもう一杯、おゝ急ぎて！

（給仕持つて來る。）

ミツチー　だけど、××××がどん〳〵近づいて來るでせう。覺えていらして、どんな具合だつたか。みんな奴等の味方に變つて仕舞つて、それから、アルビオンの選擧、勞働者の内閣。ノルドランド××××の承認、××××のマフトシユタツト占領。妾の將軍は血迷つて、めんくらがつて氣が狂つて……逃げ後れちまつたの！鐵道が全部××され、何處も彼處も××で一杯になる樣になつてから、急に出發する樣に妾にすゝめたのさ、そこで妾はお伽噺

の中にある樣に答へてやつたわ。妾は大公と一緒に居ました。あの人は逃げました。だけど妾は出發しませんでした。妾は大統領と一緒に居ました、あの人は逃げました、だけど妾は出發しませんでした。どうして貴君なんかと出發するものですかつて。するとあの怪物は妾をぶち初めたわ、え、え！彼奴は妾をぶちました。ガン！〳〵拳固でもつて。彼奴は高飛びしたけれど、捕つて、裁判に廻されて——揚句の果てはチーパツパさ。

フレイ　結構な事だ。

ミツチー　妾は泣かなかつたわ。

大公　君達二人がそんな目に會つたとしたら、奴さんも矢張りさう云ふだらうよ。

ミツチー　妾はマフトシユタツトに殘つて居ました。すると人民委員會代表がクロンバラスに到着したの、若い、立派な、人目を引く人で、民衆の偶像で、詩人で、司令官で、錠前工で、新聞記者で、雄辯家で、新人で、眞實の勞働智識階級の世界的代奏者で、我々の奇蹟的人物の！——フリードリヒ。シユタルクさ、ねえ、貴君！妾は奇麗にならうと色々と苦心したわ。遂々お終ひにおとなしい、眞黑な着物を着て、叮嚀に何かお手傳ひがしたいと云ふ願書を手にして、その人の處に行つたの。嘘を云つたり本當の事を云つたり、泣いたり、笑つたりして、妾はそ

の人の處に通されました。妾心臓がどき〳〵して、五つも若返つた位よ。

フレイ　おい、おい、ミツチー。せめて十五も若くなればよかつたがな。

ミツチー　悪黨！聽いて頂戴、××、入つて行きました。あの人は貴君の書齊でぢあ無く、以前の官廳か何かで事務を取つて居るんです。初めつから、官僚式。まるで裁判所長の樣に官僚式なの、妾はあれや、これやと話をするとあの人はむつとして「もう澤山だ。實を云へば。僕は君を通しはしなかつたんだが、一寸君を見て置かうと思つたんだ。僕は君を外國に追放する樣に手續きする。彼處に行けば誰かの役に立つだらう」。

（大公と大統領笑ふ。）

ミツチー　さうなのよ、さうなのよ、それが全く氣に入つちやつたの。妾は、亂暴な、少し堪らない位殘酷な男には何時でも惚れたわ……彼處に行けば誰かの役に立つだらう。妾は口の中でもぢ〳〵云ひました。「妾は此處でお役に立ちたう御座います」するとあの人はかう云ふの。「書記君、未だ誰か向ふで待つて居るのか、」？

フレイ　で、成功しなかつたつて判けかい？

大公　ミツチーも君の樣に投り出されたんだ。

フレイ　貴君とも御同樣にですよ、××

（新聞賣り子が走つて來る）

新聞賣り　「歐羅巴報知」！ノルドランド人民委員會代表フリードリヒ・シユタルクとの會見！未來の歐羅巴に付いてフリードリヒ・シユタルクは語る！「歐羅巴報知」！ベルマリーンのゼネラル・ストライキ！「歐羅巴報知」！（ペトリツツが走つて行く。）

大公　何て云ふ事だ！

フレイ　さうだ、此處でもストライキだ。（考へ込んで）思ひもよらなかつた事だ。どうも一寸失敗だつたわい。

大公　ねえ、ミツチー、もう長い事此處に居るのかい？

ミツチー　いゝえ、妾は色んな所に居ました。

大公　何て暮らして居るんだい？

ミツチー　御挨拶ね。

大公　だが、澤山金を持つてるぢあないか。僕の見た所ぢあ、あのダイアモンドの耳環を賣つたらしくも無いが。

ミツチー　未だ未だ趣味を持つた金持が居ますからね。

大公　ミツチー、古友達の誼みで、二萬フランばかり貸して呉れないか。それも今直ぐにね、今晩賭博がうち度いんだから。

ミツチー　正直の所、貴君の負ける手傳ひをしてやるの？ハ、ハ、ハ、ハ！……いゝえ。親しく御附合して居る最中に貴君は妾が馬鹿で無い事に氣が付かなかつたの。（立上る。）いゝえ、あんた、貴君には何も上げませんわ……だけどフランクには、と……お、フランク、妾達が醉拂つたり、樂んだりしたのを覺えて居て？……フランク、あの時の事が想出したかつたら、グランド・ホテルの三十三號においでなさい……夕方によ。夜中でもいゝわ。だけど前以て電話で知らせて頂戴、フランク、妾はとても急がしい事がしよつ中あるんだからね。心配おしで無いよ。貴君ならたゞでいゝわ。

（笑ひ乍ら退場。大公とフランク・フレイ、暫くの間默つて居る。）

大公　君のポケツトにはいくらあるね？それも金貨でね。

フレイ　一文も有りません。假りにあつたとした所で、貴君の賭博には上げられませんよ。

大公　ぢあ、コニヤツクの代を拂つて呉れ給へ。

（黑い、帽廣い服を着た宰相が、貧しい服裝をしたラ、の肩にすがつて登場。）

大公　あ、君はふくらう君ぢあないか。此の俺は、大公は君を呪つてやる！俺は君に有り餘る呪ひを投げかけるのを決して忘れはしない。（立つて、フレイに話す）僕はこの年寄りのおいぼれを怒らすのが好きだよ。

フレイ　奴はとても悄然して居ります　。フロイライン・ララ、今日は。行きませう、殿下。見ちあ居られない。

（大公と大統領退　。宰相とラ、、靜かに繻臺を通つて、篠懸の木の下のベンチに腰を下す。間。）

宰相　一緒に居たのは誰だい？

ララ　フレイです。

宰相　さうか……ララ、お前はとても惡いよ、お前の手は熱がある。

ララ　えゝ。どうして、そんな事を仰言るの。妾は病氣です。おゝ神樣、妾はもう直き死にます。それがどうしたと云ふのです？貴君のアンティゴーネになつて居る力は、妾にはもう有りません。倦き倦きしました。と云つて、貴君を棄てゝ、仕舞ふのは心がとがめます。死が私を救つて呉れるでせう。

相宰　ララ……×××政府はお前がマフトシュタツトに歸るのを嬉んで許して呉れると俺は信じて居る。彼處にはお前の友達が居るし……彼處には……

ララ　默つて頂戴。默つて居ませうね。

（ペトリツツがやつて來る。）

ペトリツツ　私は遠くから貴君方に氣がつきました。確か、宰相閣下とそのアンテイゴーネでいらつしやいませう。お、感動的だ、お、感動的だ。私は貴君の以前の秘書、――ペトリツツです。

宰相　今日は、貴君も亡國の民ですか？

ペトリツツ　えゝ……だが全然さうでも有りません。私は國を逃れた人々に關する情報を集めて居ます。こいつがノルドランド××政府の爲めになるものだと良いんですがね。

宰相　君はそんなに迄なつて仕舞つたのですか？

ペトリツツ　さうしないで居られるものですか！私は以前、何回も警察で働いた事さへありますし、併し新政府は私を信用しません。それからですな、舊宰相閣下、私は共産黨に入黨申込迄しました、併し再調査の時に除名されて仕舞ひましたよ。それは拔きとして、私達は皆シニ

ツクになりましたよ。私達は敗北した、併し私達は主義を持つて居ません。敗北に當つて、唯主義のみがそれを支へる事が出來るものです。マドモアゼル・ララ、ケツペンは今、マフトシュタツト・コンミユーンの配當委員會代表をやつて居ますよ。馬鹿ぢあありますまい？實際、奴さんは貴君に興味を持つて居ましたよ。貴君は今何處に居るかつて尋ねてました。それはさうと資本家共は殆ど全部仕事に有りつきましたよ。ガムメルは――石鹼工場に居ます。

宰相　で×××共は彼等を恐れて居ないのか？

ペトリツツ　いゝえ、彼等が、×××を恐れて居るんです。奴等が急にはびこる樣ないろんな機會が有りましたよ。×××はよくない奴等です、宰相。全くよくない奴等です。所で貴君の信仰はどうです。貴君の信仰は？貴君の信仰で事件がどんなに進行してるかを知るのは興味がありますでせうな？（面白さうに彼を眺める。）

宰相　神が試練をして居られるのだ。こんな話はやめよう、ペトリツツ、私達を殘して行つて下さい。

（ミツチーが以前の連れを二人つれてカフエーに現れる。）

ペトリツツ　あ、ミツチーの別嬪だ、急いで行かう、取入らなくちあ。相變らず歡喜の情を引起

して呉れるわい。

（遽だしげに辭儀をして去る。）

宰相　新しい世界が生れるんだ、ララ。それを疑ふ事は出來ない。俺は神を理解しなかつたのだ。

ララ　默つて居て頂戴。

宰相　俺は大抵の事は默つて居る。厭なら聽かないでおいで。併し此の事は話さなければならない。俺は神を理解しなかつたのだ。俺の手、俺の腦髓、俺の眼、俺の心臟を通し、又外の多くの身體と魂を通して起つたあの總ての恐る可き事は――それ等は主の御意に適つたのだ。苦惱の中に新しい世界が生れるのだ。

（沈默する。）

新聞賣り子（傍を走り乍ら）「歐羅巴報知」！ノルドランド人民委員會代表フリードリヒ・シユタルクとの會見！未來の歐羅巴に付いてフリードリヒ・シユタルクは語る！「歐羅巴報知」！ベルマリーンのゼネラル・ストライキ！（走り去る。）

宰相　新聞を買つて呉れ、ララ。シユタルクが未來の歐羅巴について何と云つて居るか、お前讀

んで聞かせて呉れ！

ララ　走つて行つて仕舞ひました。妾身體が惡くて、新聞賣りを追馳けて行く事が出來ませんわ。賣店の傍を通つて――買ひませう。だけど妾、そんなものを全部讀むと淋しくなるわ。死んで舞仕ひ度い、早く

宰相　その通りだ。俺自身こそさうなのだ。意味があらうと無からうと所詮同じ事だ、俺がどうしたと云ふのだ？今となつては、もう俺の惱みも必要ないのだ、さうだ。俺はもうずつと以前に大道からはづれて仕舞つたのだ。

（間。）（遠くからインターナショハルが聞えて來る。）

聽えるかい。此處でもインターナショナルを歌つて居る。

ララ　え、此處でもストライキがあるわ。ストライキは何處にでもあるんです。

宰相　勿論だ。何處にでも勞働はある。勞働の無い社會はあり得ない。そして何處でも勞働が勝利を占めるのだ。傳統は破壞される。彼等は爲し遂げるだらうか？それとも人類は炎の如く眞理を渴望し乍らも、罪惡と災害の中に滅亡するであらうか？ララ、行かう。歌が次第に近づいて來る。彼等が此方にやつて來るんだ。俺は彼等の勝利を期待する用意が出來て居る。何で後

退りが出來るものか！だが俺は彼等が嫌ひだ！俺は思想的には理解しやうと努める。そして時折、我々は彼等の準備をしてやつたのだと云ふ事を理解する。併し俺の性質が彼等と合はないのだ……行かう。ララ……お前はそんなに死にたければ、俺等はどうしたらよいのだ？

――俺達は色々な死ぬ手段を考へる事が出來る。覺えて居るかい。お前、その事で俺の子供のロベルトと話しをした事が有つたよ。彼の子は俺にこんな話をして呉れた。覺えて居るかい、お前は彼と一緒に死にたがつて、ヴェニスか、カイロにでも旅立つ樣に死なうと云つたさうだな。お前の青春の不思議な、物悲しい道件にはこの哀れな老人だ、さあ、行かう、彼等が近づいて來る。

（インターナショナルの音樂と、歌聲大きくなる。勞働者の行列の提打が赤紫に下方から反映して居る。宰相とラ、、影の樣に上手に去る。階段の下から、男女勞働者の提打が星の樣に泳ぎ出る。それが赤旗の上に反映して居る。勞働者の歌の中に幕が下りる。勞働者の歌。）

合唱

全世界は一つに合し、
喜びの呼聲高し、
友は喜びの報せを喇叭し、

平安なる處女地の上に勝利あり、
抗道の奥、工場の中、
光輝ある報せは響く、
今こそ自然は屈して、
人々の勞働にこそ榮あれ、
今こそ勝利ぞ、
燃え果てよ、舊き世界よ！
地上の幸ある天國は炎の中に生れん。

――（幕）――

ダントンの死（全十二場）

ア・トルストイ

登物人物

ダントン　山獄黨指導者、司法大臣、公安委員、フランス國防の主唱者、テロルの組織者。彼の關與した九月の虐殺は共和國の絶えざる流血の瘡痕であり、死刑制度の始まりであつた。革命の偉大なる實行家、偉大なる理想はこの血の中に溺れて仕舞つた。この悲劇的事件はダントンをして仕事から遠のかしめてゐる。

彼は過近、十六歳のルイズ・ジエリと結婚した。彼女との結婚は、彼の命令に據て死刑を宣せられた僧侶の下で行はれたのではない。彼は若い妻とセーヴルに住んでゐる。

ロベスピエール　公安委員、ジヤコベン黨指導者、不屈の意志と清廉なる德義とを有した炎の樣でしかも氷の如き、理論的にものを考へる男。賢明、細心、しかも無慈悲。フランスは無政府の抑壓を彼に負つてゐる。彼の正義と、峻嚴な幸福と、德義の理想は殆ど革命の形而上的高さに達してゐた。

カミーユ・デムレン　革會議會議員、熱情的愛國主義者、ジヤーナリスト、空想家。

セン・ジユスト　ロベスピエールの門弟、哲學的な氣持ちの、空想的青年。美男で女の樣だが苛

酷である。軍隊委員及び公安委員。

コロー・デルボア　公安委員。役者あがり。殘忍、放蕩者。

フキエ・テンヴイル　檢事　カミーユ・デムレンの引立てに依て、その椅子についた　老年、賢明、シニツク、亂暴。

エルマン　ダントンがジロンド黨と爭鬪中、彼に據てつくられた革命裁判所々長。

エロー・ド・セシエル
フイリポー
ラクロア　革命議會議員　ダントンの友人

レジヤンドル　ジヤコベン黨員

シモン　職人。中年の男。編んだ帽子を被り、ダブ〳〵の破れたズボンをはいてゐる。顏は——葡萄酒を飲み過ぎるために紫色をしてゐる。愛國主義者。

ルイズ　ダントンの妻。

リユシー　カミーユ・デムレンの妻。

アンナ　シモンの妻。

マリー　貴族出の女、秘密賭博場の女將。

ロザリー　レース女工。

ジアンヌ　裁縫工。

黑い肩掛けの女

跛の娘

太つた不器量な女。

ニノン

物賣り女

ロベスピエールの編物女

リオン人

赤帽巾の市民

黑帽子の市民

本を持つた市民

糸鬘の市民

裁判所の廷丁
かぎ鼻の青年
市民、兵士、首斬役人、その他大勢。
一七九四年、夏、パリーの出來事。

場割

第一場　マリーの部屋
第二場　酒場のある街路
第三場　ゴシツク風の敎會の内部
第四場　パレエ、ロワイヤールの内苑
第五場　ロベスピエールの部屋
第六場　ブルヴアール
第七場　同

第八場　革命裁判所
第九場　裁判所前の空地
第十場　一時間後の同じ場處
第十一場　牢獄
第十二場　ギロチンのある廣場の一部

第一場

マリーの部屋。ぼろ〳〵になつた金線織の大きな扉掛け。剝げ落ちた壁の破片。金色の家具類。燭臺で數本の蠟燭が燃えてゐる。カルタ用のテーブルの傍に、エロー・ドウ・セシエル、マリー、カミーユ・デムレンが座す。横の方にルイズとリユシー、窓の所に、こちらからは見えないやうに、ダントンがカーテンの蔭に立つて居る。

ルイズ　私、パリーが怖ろしいわ。せせこましくつて、騷々しくつて。パリーへ來るたんびに、いつでも私、氣持が惡くなるわ。

リユシー　セーヴルは綺麗なところ？

ルイズ　えゝ、私達んところは綺麗よ。小さな庭と小さな野菜畑とがあるの。良人はね、私に

雌雛のひよこを四羽と雄雛を一羽呉れたの。私、サラダも大根も隠元豆も買はなくつて濟むの、すつかりうちで取れるんですもの、私達、よく公園へ散歩に行きますわ、(あたりに眼を配つて囁く)あちらではね、斯んな噂があるんですよ、夜になると、公園の中で、馬の蹄の音や、角笛の鳴る音を多勢聞いたものがあるんですつて——それに、王様の幻を見たつて話ですよ。

リユシー　シツ！もつと小さい聲で！

エロー(カルタを切る)　僕の舌は、もう愛と云ふ言葉を云ふことが出來ない程、使ひ耗らされて了つたよ。「俺は愛する」つて云ふ積りでゐると、舌の奴は、「死を！」つて云つてゐるんだ。呪はれた舌さ……昨日なんか、可愛い娘さんに出會つたんだが、懸命に努力してゐるのに、つい、その娘さんを『後家さん』なんて呼んぢやつた。

マリー　で、その娘さんは何て返事しましたの？

エロー　なあに、その娘にとつちや、そんな、ことはどうでも良かつたんだ。

カミーユ　ギロチンのことを『御家さん』て云ひ出したのは誰かな？

エロー　街の餓鬼大將共さ。

カミーユ　リユシー、何だつて默り込んでゐるんだい？退屈なのかい？

リユシー　いゝえ、さうぢやないわ。

エロー　革命の齎らした効果の一つはこれさ。僕達は退屈するつて事から免疫になつたつてわけだ……全くさ、パリーでは、僕達は誰だつて、退屈なんかしやしないからな。

マリー　あんたのキングを頂戴してよ。

カミーユ　リユシー、も一度歌つてお呉れ！

リユシー　でも聽いて下さるの？

カミーユ　夜だつて晝だつて、いつだつて俺は悦んで聽くよ。(立ち上つて、リユシーに堅琴を持つて行つてやる)　御前が歌ひ出すと俺はいつでも、やがて、やがて全世界が解放され、勝利を博した人類全體が歌ひ出すやうな氣がするのだ。俺には信念が湧いて來るんだ。

リユシー　(堅琴の調子を合はせる)

エロー　カミーユはしよつちゆう音樂と人類のことを喋つてゐる。ジヤーナリストだからな。俺は人間なんてものを輕蔑するよ。人類なんてもなあ、獸の寄り集りさ。髪の毛を逆さに撫でられた時、咆えたり喚いたりするぐらいが關の山さ。マリー、どうだ、カルタに今夜一晩を賭けちや？

マリー（微笑んで）　スペードのクインに今夜一晩賭けるわ。

カミーユ　で君は何を賭けるんだい？

エロー　マリーの御意の儘さ。十萬フランでも、俺の首でも、どつちでも同じだ。マリー、そのクインは頂戴したよ。

マリー　負けた所で、貧乏になるわけぢやなしさ。

（リユシー歌ひ初める。みんな聽く、カミーユは立上つて片手をカミンにかけ、片手で頭髪をなぶる。フイリポオ登場。）

フイリポオ　今晩は。

エロオ　やあ、フイリポオ。掛け給え。どうだ金を持つてるかい？

フイリポオ（室内を見廻して）　君達、こんな所で歌つて遊んでゐるのか。

カミーユ　何か持ち上つたのかい？國境の彼方から悪い報せでも來たつてのか？

フイリポオ　いや〳〵、萬事うまくいつてるさ。

エロオ　大將どうやら、又ロベスピエールに面會したらしいな。それで早速、消化が悪くなつたんだらう。

フイリポオ　今日又、首が二十落つこつたよ。

エロオ　この雨にもめけず、君は、首の落ち工合を見物して來たのかい？

フイリポオ　ちえ、眞平ごめんだ！

リユシー　誰が死刑になつたの？

カミーユ　エベール派の連中さ。

フイリポオ　彼等がアティストだつてだけの理由でギロチンに送られたんだ。

エロオ　をや〳〵！

フイリポオ　ロベスピエールも、セン・ジユストも、クートンも、あんまり神經過敏過ぎるよ。

エロオ　なあに、あの先生方は臺所を掃き清めてゐるだけのことさ。革命の間に、ほろ屑があんまり澤山、臺所へ集り過ぎたからな。庖刀を持つたロベスピエールと、ブラツシを持つたセン・ジユストと、お湯のはいつた手桶を持つたクートンとを想像して見ろ！フランスは、銅のシチユー鍋のやうにぴか〳〵光り輝くことだらうつて！

カミーユ　いや全くだ、でなきあギロチンの刄のやうに光るだらう。

フイリポオ　今日僕は、危險が僕達にも迫つてゐるつてことが分つたよ。おまけにこの危險は

君達が思つてゐるより餘程近いもんだぜ。

カミーユ（拳固でストオブの棚を叩く）　だが、一體何時迄僕達は血の中でもがいてみようつてんだ

ロベスピエールは、まるで鞠でもおもちやにするやうに、斬り落した首を弄んでゐるんだ。

我々は眞實な共和國を實現させなくちやならない。大赦の法令が空氣のやうに必要なんだ。あらゆる人間の權利は、ロベスピエールの机の抽出の中へ封じ込まれてゐるんだ。

エロオ　まあ君、誰だつて自分の欲する通りに生きて行くしかないんだ――こいつが眞先の問題さ。若し俺の方に力がありさえすりや、俺は先づ第一に、ロベスピエールの首でケン玉を拵へて遊ぶね。

カミーユ　僕は違ふ。僕は何よりも先づ美を要求する。國家機構といふものは、着心地の良い美しい衣服のやうなものでなくちやならん。少しでも動きの自由を妨げるものであつちやならん。筋肉のあらゆる慾望、あらゆる動きは、そして生命のあらゆる躍動は、直ちに自由に實現されなくちやならん。ところがだ、僕達は血を乾からびさせる爲に、氣違ひに着せるごつ〳〵したシヤツを着せられてゐるんだ。僕には異議がある！僕は、僕達の房々とした捲毛にバラの花を飾ることを、泡立つ酒の盃を、オリンピアの競技を、酒宴の歡樂を欲する。フランスは實

に美しい國だ。僕はこのフランスが大古の神のやうに光り輝くのが見たいんだ。（窓の方に振り向く）ダントン、君は國民議會で一荒ばれ荒ばれるべきだよ。

フイリボオ　ダントンは此處にゐるのか？

エロオ　ダントン、どうだ、も一度フランスを君の兩肩に脊負つて見ちや、そして何處か、どぶ溜めからずつと遠くへ運んで行かないかね。

カミーユ　君は、も一度戰を初めなくちやならんよ。君が愚圖々々してゐると、僕達は破滅だ。

ダントン（窓の凹みから出て來る）　俺が何をしなくちやならんのだつて？ダントン、君は斯うしなくちやならん。ダントン、革命議會へ行つて咆えろ！ダントン、フランスの車輛を兩肩で荷へ！か。一體、此の上俺に何をしろつて云ふんだ？一萬の獅子のやうに咆えろつて云ふのかーこの上俺が布告を千通も書いてみた所で矢張り十萬位の首が斬り落されるんだ――太陽は必要に應じて東に現はれ西に沈むんだ。（ルイズの傍に掛ける）お前の唇は慄へてゐるぢやないか。いいさ、いいさ。雛ツ子を四匹と牝雞一羽とをお前にやつたとした所で、俺はやつぱり相變らずのダントンさ。人間の肉を、子供をおどかす化物を喰ふダントンさ。ところでだ、この先生達は俺をけしかけてゐる――ダントン、君はあんまり長く君の小さな可愛い女の胸の上で現をぬ

かしすぎてゐた。さあ、來て！フランスを救へ！とね。（立ち上る）此處でみんなが喋りあつてゐること、呶鳴りあつてゐること、大袈裟に身振り手眞似をやつてゐるやうな事柄は要するに單なる言葉に過ぎないんだ。革命には革命獨自の法則がある。必要な場合には、革命は我々をもれ上つた波の頂きへ祭り上げる、とすぐに又、深淵の眞唯中へ逆さに投げ込んで了ふ。（身を屈めて、ルイズに接吻する。）ところで、お前の眼は別な法則さ。

ルイズ　家へ歸りませうよ。

ダントン（上の空で）　うむ、うむ、家へ歸らう。

カミイユ　踏み出した道の中途で立ち停まるといふことは魂の弱小さを示すもんだ。そんな位なら、初めから闘爭を開始しなかつた方がいゝ位だ。

ダントン　闘爭か？俺は疲れちやつたよ。俺は善良な市民になるつてこの可愛い奴に約束したんだ。俺は疲れた。君にこの言葉の意味が判るかい？ロベスピエールはまだ戰つてゐる！まだ血と泥沼の中で蹶いてゐる。奴さんはまだ理想と言葉の力を信じてるからなんだ。でなければ奴もやつぱり信じてはゐないが假面を被つてゐるのさ。

フィリポオ（ダントンに近づき、他の者には聞えないやうな聲で話す）　君に知らせたいことがあつて

來たんだが——君はつけられてゐるよ。僕はスパイを二人見つけた——一人は、街角の所に突立つてゐるし、も一人の奴は窓の前に隱れてゐる。それからも一人の奴は格子戸に齒牙みついてゐやがる。君は此所を出て何處かへ身を隱したはうがよからう。

ダントン（聲高く）　隱れなくつちやならないつて？何處へ？外國へか？君は俺が祖國を靴の底へ藏つて持つて行けるとでも云ふのか？

ルイズ　あの人はお友達が危險を知らせて下さると、いつでもあんな風な返事をなさるんだわ。私達パリへ來なければよかつた（ハンケチで顏を隱す。）

リユシイ　そんなに危いの？

フィリポオ　えゝ危い

エロオ　その言葉のお蔭でもう三日も僕の首は痛んでゐるんだ。

カミーユ　シャラントンのバニスで晝飯を食つてる間に僕達はダントンとロベスピエールを會見させるやうに骨を折つたんだ。僕達はもう一度二人に仲直りして貰ひたかつたんだ。

ダントン（笑ふ）　その時俺は彼奴にこの掌を嗅いでみろと云つてやつたさ。「どうだ、ロベスピエール、臭ひがするか？どんな臭ひがする？血の臭ひがする？かね丁度いまルイズの香水を塗

つて來たばかりさ！」（笑ふ）　奴さんの鼻はもつと長くなつたよ。臭ひを嗅いだわけなんだ
ハヽヽヽ！

カミイユ　ロベスピエールは斯う云つたよ。「戰の最中にある共和國を武裝解除せしめようと骨折るやうなものは立派な市民と認めることが出來ない。また、鐵の如き獨裁のみがよくフランスを救ひ得る時に寛大であつたり、涙脆かつたりしようとする者は矢張り立派な市民と認めることが出來ない。」

リユシイ　ほんとう、ダントン？

ダントン　なあに、奴等は俺に指一本觸れることは出來はしないさ。まだ俺の番は來やしない。あゝ畜生め、なんだか頭がくさ〳〵しやがる。政治つて奴に取つつかまつて俺はもううんざりして了つた。この地上の何處かに、せめて一瞬間でも自分自身のことを忘れてゐられる場所はないものかな？

（窓の外で騷がしい物音が聞えだす。人々の叫び聲）

ルイズ（立ち上つて）　まあ、何だらう！

（みんな耳をすます。フイリポオは立つて素早く蠟燭の明りを消す。たゞ一本の蠟燭だけが殘される）

ダントン　何だ、あれは？聞えるかね！

カミイユ　なあに、街の喧嘩さ。

ルイズ（ダントンに）　出かけませうよ！

ダントン　カミイユ、君はセーヌの向ふ岸のあの叫び聲を覺えてゐるか？あの恐ろしい叫び聲を、あの獸のやうな喚き聲を、あの血を、松火を、あの耳を裂くやうな呻き聲を？君はあれを忘れたか、忘れたか？（急ぎ足に出口の方に行く。その後へフイリポオがつゞく。）

ルイズ　お出掛けになるの

ダントン　此所に待つておいで、ぢき歸つて來るから！

——（幕）——

第二場

パリの狹い二つの街路が行き違つた十字路。高い層を有つた色褪せた家々。或る薄汚い酒場のドア。壁の角から鐵の支柱によつて街燈が吊り下つてゐる。酒場のドアの所で格闘が始まつてゐる。叫び聲。

シモン　魔法使ひめ、呪はれた魔法使ひめ、魔法使ひめ！

アンナ　助けてえ、助けてえ！

シモン　何をこん畜生、生かしちや置けねえ、さあどうだ、さあどうだ――こん畜生！

（シモンの妻は着物を引き裂かれて街上へ馳け出す。街角の後や家々の戸口から人々が姿を現はす。）

人々の聲　シモンだ！シモンだ！また彼奴だ！分けてやれ！

アンナ　人殺し！人殺し！

シモン　頭を叩き割つてやるんだ。此奴は魔法使ひだ。

アンナ　何云つてやがんだい！醉つ拂ひのくそぢぢい。

シモン　この不貞腐れめ！

シモン　皆さん、あつしの娘はどこにゐるんだ？この魔法使ひ女は、あつしの娘つ子をどつかへ

やつちまやがつた。いや、彼奴はもう娘ぢやねえ。あの娘はもう、娘でもなきや、奥さんでもなきや、女でもねえんだ。俺の娘は夜鷹になつちやつたんだ！

赤い頭布の市民　靜かに、一寸靜かにし給へ、シモン。

シモン　手前こそ靜かにしろ、老ひぼれの、禿げ頭！（呻きながら地面へ倒れる）

アンナ　シモン、シモン、どうしたの？皆さん、この人はほんとにいい人なんです。お酒を飲んでない時はほんとにいゝ人なんです。

黑い帽子の市民　この男を家へ連れて行つてやらうぢやないか！

赤い頭布の市民　一體全體どうしたつて云ふんです？

アンナ　私の娘はそれは心掛けのいゝ子なんです。あの子は私達が始終パンも葡萄酒もなしでゐるのを見て、私達を氣の毒がりましてね、それで貴方、街へ出るようになつたんですよ！

シモン　そら見ろ、白狀しやがつた！

アンナ　何を云ふんだい、醉つ拂ひ、白癬の駱駝！でも、もしも私の娘が……あゝ、あの子はほんとうに天使のやう美しい清い子です……えゝ、えゝ皆さん、私それを誓ひますよ……もしあの子が街からお客さんを引張つて來なかつたら、一體お前さんは何を喰べ何を飲むんだい、ね

え、皆さん　考へて下さいまし、娘はただもう此の人のために働いてるんですよ。それだのに
この人は……
シモン　双物をよこせ！叩き斬つてやるんだ！
赤い頭布の市民　双物君のは妻君に對して必要なんではないよ、シモン。双物は君の娘の肉體を
金で買つて恥知らずな眞似をする奴等に對して必要なんだ。
人々の聲　さうだ、全くだ、全くだ！
赤い頭布の市民　さうだ、働かない奴等に對して、不行跡な奴等に對して、金持どもに對して双
物を用ふべきだ！わし等は腹が空いてゐる。わし等にはパンもなく、肉もなく葡萄酒もない。
わし等が空腹と渴きに呻きながら手を差し伸べると、あの遊んでゐる奴等は、不行跡な奴等
は、革命の間に財産を作つた成金どもは、あのやくざ者共は、わしらに向つて斯う云ふ。『お
前達の娘を賣つてくれ！』と。まさに斯ういふ奴等に對してこそ双物が必要なんだ。
人々の聲　うまい事をいふぜ！その通りだ！やつゝけろ、奴等をやつゝけろ！
黑い帽子の市民　人々は俺達に云つた。『貴族は民衆の血を啜つてゐる』と。そこで俺達は貴
族どもの首を締めてやつた。人々は云つた、『ヂロンド黨は民衆を飢えさせようと目論んで

ゐる』と。そこで俺達はヂロンド黨員の首を斬り落してやつた。それでも俺達は一向空腹が減
らない。俺達には、薪もなく、パンもなく、鹽もない。一體誰が、一體誰が俺達の巨人のや
うな仕事を、俺達の超人間的な苦惱を利用してゐるのか？其奴は誰だ？革命を利用して私腹を
肥やす奴等を追つ拂へ！金持どもを追つ拂へ！體にボロを着てゐない奴等を殘らず殺してしま
へ！
人々の聲　ボロを着てゐない奴等を殘らず殺してしまへ、殺して了へ！
黑い帽子の市民　俺達の頭の上で威張つてゐる奴等を殘らず殺してしまへ！
赤い頭布の市民　讀んだり書いたり出來る奴を殘らず殺してしまへ！
人々の聲　讀んだり書いたり出來る奴を殘らず殺してしまへ、殺してしまへ！
（曲り角の所で人波が動搖する。一人の青年が街燈の下へ引きずり出さる。）
人々の聲　此奴はハンケチを持つてゐるぞ！見ろ、ハンケチだ！此奴はハンケチで鼻をかんでや
がる！貴族だ、血を吸ふ獸だ！街燈のところへぶら下げてやれ、ぶら下げてやれ、ぶら下げて
やれ！
青年　紳士諸君！

赤い頭布の市民　此所には紳士なんかゐねえ、此所にゐるのはサン・キュロットだけだ、其奴を街燈にぶら下げろ！

（群集は街燈を外してカルマニョールを歌ひ、且つ踊る。）

青年　かんにんして下さい！かんにんして下さい！

赤い頭布の市民　かんにんしてくれだつて？へん、俺達位ゐ慈け心深え人間はゐねえんだぜ！何故つて、お前さん方はわしらを空腹でもつてノロ〳〵と殺しなさる。ところがわしらは、お前さん方を此の街燈の柱で瞬く間に殺して進ぜるぢやねえか、お前さんに忠告して上げるが、ま　ア大人しくしなせえ。そして舌がダラリと垂れ下らない前に、この市民達の御慈悲深いやり方を感謝することを忘れねえようにしなせえ！

青年　どうとも勝手にしろ！俺をぶら下げて、それで君達がもつと樂になるといふんなら俺をぶら下げろ！（群集の間に笑ひ聲が聞える。）

人々の聲　ハ、ヽヽうめえ事を云やがる！ブラヴオ、ブラヴオ！放してやれ！

赤い頭巾の市民　市民諸君、俺達にはそんな權利は……

ロベスピエール　何が起つたんですか、市民諸君、聞かして呉れ給へ、

人々の聲　ロベスピエールだ！ロベスピエールだ！ロベスピエールだ！

黒い帽子の市民　かういふ譯です、市民ロベスピエール。去年の九月に流された血は、俺達に幸福を持つて來て呉れはしなかつた。ギロチンの動きかたはのろすぎる。我々はみんな空腹です。我々にパンを下さい。

人々の聲　パンを、パンを、パンを！

（放された青年は誰にも氣附かれずに走り去る。）

ロベスピエール　法律の名によつて！

赤い頭巾の市民　どういふ法律だね？俺達の腹……これが法律だ。

ロベスピエール　法律は民衆の神聖な意志です。

赤い頭巾の市民　俺達は民衆だ。俺達はどんな法律も欲しかあねえ。法律なんてものは無くつてもいゝつて事が法律なんだ。碌でもねえ法律なんて糞喰らへだ！

ロベスピエールの女中（髪の毛をクシヤ〳〵にした野蠻な赤い顏の女。肩にショールをかけ、手に編みかけの靴下をもつてゐる。）　お聞き、お聞き！ロベスピエール様が何を云ふか、お聞き！この方の人々仰有ることをお聞きなさい！正義の聲をお聞きなさい！

人々の聲　俺達にパンを與れると約束してくれりやいゝんだ。俺達は食ひたいんだ。葡萄酒とパンをよこせ！

ロベスピエール　善良なる市民諸君！諸君は諸君自身の手を以てフランスの土地を害する惡草をむしり取つた。諸君は國境の外に敵を放逐して、太古に於てさへも其の比を見ないほどの堂々たる威風を示した。昨日まで諸君は奴隷であつた。今日諸君は偉大なる民衆である。併しながら忘れてはならない、我々が我々の權利を、新しい人間の權利を、卽ち自由を、平等を、博愛を維持するためには、これからもなほ非常な努力と勇氣とが必要であるといふことを忘れてはならない。敵は未だなほ悉く敗北したのではない。敵は諸君の間にもゐる。最も危險な敵は、無政府と無規律である。諸君はパンを、と叫ぶ。パンは得られるであらう。我々はそれを見出さねばならない。諸君の手を見よ、諸君の手は拳を固めてパンを奪ひ合ふ時、パンの香ひがしはしないか？市民諸君よ、ローマ帝國時代のあの見苦しい民衆の眞似はしないで欲しい！彼等はたゞ、パンと快樂とを要求することだけを知つてゐた。そして劍は、彼等の弱々しい手から滑り落ち、そしてその時永遠のローマの城壁にはバルバールの大軍が現はれたではないか。否、私は知つてゐる。フランスは必要とあれば齒を喰ひしばり、軍人の帶を固く締めて腹を締めつけることが出來るであらうといふことを。パンは正義と光榮と共に獲られるであらう。民衆諸君、諸君の法律制定者達は夜も眠ることがないのである。彼等の眼は闇を看破り、諸君の眞の敵が何者であるかを見定めてゐる。

人々の聲　ロベスピエール萬歳！

（ロベスピエールは其所を立去りかけてダントンに出會ふ。ダントンは微笑を浮べながら彼の演說を聞いてゐたのである。）

ロベスピエール　やあ、君でしたか、ダントン？

ダントン　左樣、わしだ、ロベスピエール。

ロベスピエール　パリへは何時から？

ダントン　今朝着いたばかりさ。

ロベスピエール　セーヴルから？

ダントン　さう、セーヴルから。君がどんな風に民衆に話をするか聞かうと思つて馳けつけて來た譯さ。どうして、なか〳〵うまくなつたぢやないか。どうも今日の演說は原稿の用意なしでやつたらしいね。それとも何かね、街へ出る前に一應書いてみたのかね？

ロベスピエール　聞くところによると、君はセーヴルで奥さんと愉快に暮して居られるさうですな。君の家は豊かで毎晩大勢の友人が集つて來て、河のやうに酒を流して、カルタをとつてゐるさうですな？

ダントン　それは何かね？訊問かね？

ロベスピエール　いや、ただ友人としてお知らせするだけさ。（去る）

ダントン（大聲で笑ふ）　ローマ人か！清廉な人士か！民衆の良心か！ワツハハヽヽヽ……

シモン（酒場の戸口に現はれる）　誰だい、ローマ人なんて云やがんなあ？　おや、あんたですかい、ダントン？やあ今晩は、お久し振りで。ずゐぶん長くお目に掛りませんな。

ダントン　どうしたい、その後は、使ひ古された砥石君？

シモン　よかああありませんや。飲んでるところでさあ。たつた今嬶の奴を引つ叩いてやつたところでさあ。いや、ギロチンの刄にかけて誓ひますがね、あつしが嬶を引つ叩いたんぢやねえ、あつしの絶望が引つ叩いたんでさ。あつしはもう退屈しきつてるんですぜ、ダントン。あつしは今ずゐぶん飲んでるんですが、それといふのも退屈で仕方がねえからなんで　噂によるつてえと、あんたまで嫌に涙脆くなつたつていぢやありませんか。氣をつけなせえ！去年の九月に

あつし等がどんな風に共和國を清めたか、あんたよもや忘れはしねえでがせうな？あんたは耳まで血を浴びてゐましたぜ。何しろ大したもんだつた。あの頃は愉快でしたな！ダントン、あつしは自慢にしてゐるんでさ。ほら此の殘つた齒で、不身持なランバールの阿魔つ子の心臓を喰ひ破つてやつたんですからね。

ダントン　ふん、汚い獣め！（シモンを押しのけて去る。）

シモン　氣をつけろ、ダントン、氣をつけろ！

——（幕）——

第三場

ゴシツク式に建てられた教會の内部。祭壇が演壇に變つてゐる。その下にテーブル、その周圍に半圓劇場式に澤山の腰掛が並んでゐる。吊り下つた燈架から數本の蠟燭が輝いてゐる。壇上にレジヤンドルがゐる。

リヨン人（自席から叫ぶ）　リヨンの兄弟達は何故諸君が死刑執行を遲らせてゐるか、其の理由を知りたいために俺を派遣して寄越したのだ。（ガヤ〳〵云ふ聲）諸君はリヨンが何であるかを忘れたのか？リヨンは反革命のドブ溜めであり、巢窟なんだ。俺達には大衆的死刑が必要だ。だがそれよりももつと俺達は次の事を要求する。即ち都市の城壁を爆破することだ。××や絹製造所を徹底的に破壞することだ。いゝか諸君、もし諸君が充分な決意をしないならば俺達は俺達自身の方法ですべてをやつてのけるであらう。

人々の聲　リヨン・ジヤコベン黨員萬歲！

レヂヤンドル（リヨン人に）　もう一度繰り返して云ふが、リヨンの方へ眼を向ける必要はない。此所、革命の中心地であるパリに於ても絹の衣服を纏ひ四輪馬車に乘り、酒を飲み遊蕩をなし、而かも……いゝか、而かもだ、共和國の三色旗の下に身を置きつゝ活然としてそれらの事を

することの出來る人間共は平穩無事な生活をして居る。劇場の棧敷では彼等はチヨコレートをモグ〳〵させつゝ、腹一杯に飽滿し、貴族階級の言葉で話しあつてゐる。

人々の聲　恥知らずだ！追つ拂へ、殺せ！

レヂヤンドル　市民諸君……反革命は今やその頭を擡げてゐる。諸君に尋ねる。公安委員會は何を考へてゐるのか？

コロオ・デ・ルボア（自席から）　ところで、俺は君に聞くが、レヂヤンドル。さういふのらくら者どもに露骨な放蕩三昧の手本を示したのは一體誰だか君は知つてゐるか？　誰が一體其奴等革命の强盜どもを鼓舞してゐるかを知つてゐるか？君はその張本人の名前を知つてゐるか？

（緊張した沈默）

ロベスピエール　一言話させて貰ひたい。

レヂヤンドル　話し給へ、市民ロベスピエール。

ロベスピエール（壇の方へ進む。靴の踵で鋭い音を立てながら。丈はあまり高くない。香水を振りかけた帽を被り、さつぱりした褐色のフロツクコオトを被てゐる。手には卷いた原稿を持つてゐる。）　我々は行動を起すためには、ただ憤怒の叫びを待つてゐたのだ。然るに今や、私は既に單なる叫びでは

なく、危急を告げる警報を耳にした。然り、我々は我々の敵が武裝してゐる間に、そして戰ひの位置に就く餘裕を敵に與へてゐる間に、我々の眼は見開かれてゐたのだ。そして今や敵の位置はあり〳〵と觀察することが出來る。我々の攻擊は一つ一つ見事に敵の心臟に命中するであらう。

ラクロア（レヂャンドルに）　誰のことを話してゐるんだらう？

レヂャンドル　共和國の敵のことをさ。

ロベスピエール　昨日私は共和國の內部にゐる敵は二組から成り立つてゐるといふことを諸君に話した。その一つは、アテイスト及びアナーキストである。彼等は旣に取り除かれた。エーベルとその一味は彼等の唾棄すべき無秩序な行動によつて共和國を辱しめた。エーベル及びその徒黨は昨日死刑に處せられた。

人々の聲　革命萬歲！

ロベスピエール　然しながら、第二の內敵は誰であるか、未だに取り除かれず、そしてその盲目的な信念の上に勝ち誇つてゐる第二の內敵はそも〳〵誰であるか？この我々の第二の敵は革命から生れ出たところの怪物共である。卽ち寄生虫である。彼等の生活の全內容は飽滿であり淫

樂であり、彼等の宗敎は無節操きはまる放蕩である。かゝる人間どもが如何なる高價な仕拂ひをしても、平和と安樂とを得ようと要求してゐるのだ。彼等は同情を叫び憐憫を叫ぶ。彼等は死刑の廢止を要求してゐる。彼等の鬪爭目標は大赦これである。彼等はフランス民衆の心を柔弱ならしめ、それを骨拔きにし、そして再び民衆を王の足もとに投げつけようと望んでゐるのである。

人々の聲　誰のことを話してゐるんだ？また何か新しい陰謀を發見したのか？

ロベスピエール　私は飽くまでも繰り返すであらう。フランス民衆の神聖なる任務は次の如きものであるといふ事を。卽ち、全世界の上に最も貴高なる正義と自由と平等と、而して博愛とを斷乎として打ち建てること……人類を溺れさせるところの凡ゆる唾棄すべき惡德を惡草の如く根元から引拔いて棄て去ること。そのためにこそ、革命は實現されたのであり、そのためにこそ共和制は打ち建てられたのである。共和國の武器は他を畏怖せしめることであり、共和國の勢力は德である。しかし乍ら德は冷嚴なしにはあり得ない。惡德の盲動に對して無慈悲に鬪爭することこそ最も偉大なる德である。テラアは共和國の純粹性である。人は我々を吸血鬼と呼ぶ。私が人間の心臟を手に取つて盃の中へ生血を絞りこんでゐる圖が諸外國に於て非常な人氣

を博してゐるといふことを私は知つてゐる。我々が奴隷たる境遇に甘んじようとしないといふ正にそのことのために人々は、唾棄すべき僞善を以て我々を憎んでゐるのだ。我々が共和國の敵共の陰謀に對するにテラアを以て應へる時、常に外國では恐怖と憤怒の波が涌き立つてゐる。テラアは我々の力であり我々の純粹性であり、我々の正義であり、我々の慈悲である。いまテラアの廢止を說敎することは、共和國並びにフランスの滅亡を說敎することに外ならない。

人々の聲　萬歲、ロベスピエール！公安委員會萬歲！テラア萬歲！

ロベスピエール　然るに今や、我々の新しい敵、腹一杯に食ひ飽きた彼等は、感傷的な聲を上げで叫ぶのである。「死刑制度を廢止せよ、テラアを廢止せよ！凡ゆる投獄者を釋放せよ、民衆の悲慘を利用して儲けた成金共を赦せ、あらゆる貴族及び王黨派を赦せ！」斯う叫んでゐる我々がいま頭の頂から足の先端まで武裝したヨーロッパに面と向つて立つてゐる時、オーストリヤ皇帝及びプロシヤ王の侵略隊に面してゐる時、かの自由の窒息者共、…卽ち、コプレンツの惡臭芬々たる毒草に面してゐる時、西方から我々の上へ英吉利が將に襲ひかゝらうとしてゐる時、而して東方からはロシアの女帝の物凄い怪物が現はれてゐる時、斯かる決定的瞬間に於て

彼等は我々の手から武器を捨てることを欲してゐるのだ！更にこの喰べ飽きた人間共は、この惡德漢どもは、彼等の惡德を全國民に傳染せしめ、我等の力の源泉を毒してゐるのである。共和國の自由に對する、恐らくは最も裏切り的な最も恐るべき危害、地獄の如き策動、それは國民の一致團結を紛碎し、これを無力にすることである。私はまだはつきり知つてゐるわけではない。多分斯くの如き意圖はその男の頭の中に無意識的に生れたのであるかも知れない。しかし、その原因がどうであるにもせよ、その危險は斷じて忽せに出來ないものである。惡德は雷に道德的罪惡であるのみならず、政治的犯罪である。彼が曾つて共和國のために重大なる任務を果した男であればあるほどその男の惡德はより一層危險である。

（間。ロベスピエール水を飲む。）

ラクロア（レヂャンドルに列席）　さあ君、わかつただらう。奴等は化物だ！

ロベスピエール　諸君はつひ最近まで破れた帽子を被り、穴のあいた靴を穿き食堂の棚の傍で兵士や職人やサン・キユロツト達と一緒に忙しく朝飯をかつ込んでゐた男の姿を思ひ浮べるならば、私が誰のことを云つてゐるのであるか容易に了解されるであらう。いま其の男は硝子戸のついた綺羅美やかな四輪を驅つて走り、前貴族の家でカルタ遊びをなし、郊外に別莊を買ひ込

み絹の上衣を纏ひ、贅澤な晩餐會を催して、河のやうに葡萄酒を流しパンと肉の喰べ餘りは惜し氣もなく犬に與へてゐるのである。（列席者達の間で憤慨した咳きが聞える。）然り、その男は今、プリンスの如く生活してゐる。これ以上云ふ必要はあるまい。その男の肖像はこれで充分描かれたと思ふので、諸君に聞くが、何故今日まで民衆の財寶を掠めとつた手が切り落されなかつたのであるか？何故惡德の毒素を我々すべてに傳染せしめるところのこの男の體を斷乎として穴藏の中へ叩き込まなかつたのであるか？然し乍ら市民諸君、安心して欲しい。共和國を以て自から投機手段とし、革命を自己の職業の如く心得てゐる彼等に對しては何等の憐憫も與へられないのである。そして、君、リヨンの兄弟よ、君の同志の所へ歸つて傳へてくれ給へ。法律の劍は、この劍を托された者の手の中で未だ錆びてはゐないといふことを。我々は再び、全世界の前に偉大にして且つ怖るべき正義の模範を示すであらう。

（議席から猛烈な拍手。ロベスピエールは壇を下り、事務的な小刻みな足取りで去る。）

ラクロア（レヂヤンドルに）　さあ判つただろう、ロベスピエールが誰のことを話したんだか？

レヂヤンドル　うむ、わかつた。

ラクロア　君達は共和國を亡ぼすのだ！いまに見るだらう……やがて公安

委員會が革命廣場へ自分の頭を曝すのを！氣狂ひ沙汰だよ、こんな怖ろしい犧牲を民衆に投げてやるなんて！

レヂヤンドル　ダントンは今どこにゐるんだ？

ラクロア　パリにゐるよ。

レヂヤンドル　行かう、ぜひともダントンに會ふ必要がある。

——（幕）——

第四場

パレエ・ロワイヤールの内苑。カフエの突出た庇の下の小卓にエロオ・ド・セシエルが掛けてゐる。男女の群れが行き交ふ。

エロオ（通りすぎる娘に）　おい〳〵、ニノン、い〳〵ことを教へてやるがね、そのスカートの穴をもつと大きく破り給へ。さうすりや尠くともお前の腿がまる見えになるだらうよ。

ニノン　馬鹿！

エロオ　ほを〳〵、お前、襟に何をつけてゐるんだ？

ニノン　ギロチンのマークよ。

エロオ　お前ジヤコベン黨になつたのかい？

ニノン　二日前に、私達の「支部」は全部ジヤコベン黨に加入したのよ。ねえ、エロオ、あたし眞面目に云ひますけれどね、山嶽黨をやめてジヤコベン黨にお入んなさいよ、あんたの首がチヨン斬られるなんて情けないわ。

エロオ　もつと此方へお出で。接吻してやらう。

ニノン（彼の手をふり離して）　あんたと接吻なんかしてる暇はないわ。（走り去る）

エロオ　ぢや、スカートの穴をもつと擴げろよ、スカートを。（笑ふ）

（ダントンがロザリイとジヤンヌを兩手に抱へて現はれる。）

ダントン　エロオ、この娘さん達が何だか知つてるかい？テユイルリイから來た森の女神さ。俺はファウンの神のやうに後を追つ掛けまわしたんだ。この娘達が何をやつてたか判るかい？ロザリイは雀を飼つてゐたんだ。そして雀にこんな名前をつけてゐたんだ。マラア、フイレモン、ヴオルテール、ブリツポオ。

ロザリイ　嘘おつしやい。私ブリツポオなんて口にも出しやしないわ。七月には妾ジロンド黨の死刑に贊成したほどなんだもの。

ダントン　で、ジヤンヌは、木の枝に乘つかつて、搖すぶりながら聲一杯に氣取つた聲でマルセイエーズを我鳴つてゐたのさ。

エロオ　これは〳〵娘さん方。俺もダントンも今朝政治から身を引くことに定めたんだ。政治なんて糞くらへだ！俺達は出來るだけ近く自然の懷に抱かれようと定めたんだ。どういふ風にしてそれを實行しようかと永ひあひだ思案したんだ。ところで到頭、すばらしい天才的な考へが浮んだ。テユイルリイへ小娘を二人見つけに行くつてことさ。その娘達は、お馬鹿さんで、オ

ツチヨコチヨイで、滑稽でなくちやならない。

ロザリイ　えゝ、あたし達ちようど其の通りなのよ。

ジヤンヌ　ロザリイ、この人達あたし達をどうしようて云ふのかしら？

ロザリイ　あたし達と獸ごつこでもしようつて云ふんですよ。

ダントン　獸ごつこか！此奴はすばらしい！獸ごつこをやらう！

ジヤンヌ　市の外へ出かけて行くの

ダントン　さうだ、何處かへ出掛けて行かう。市を出掛けて行かなくつたつて、獸ごつこが出來ない譯ではないが。

エロオ（聲をひそめて）　俺達は四人とも素つ裸になつてやるんだよ。

ジヤンヌ（陽氣に）　あーら、ロザリイは晝間はお金をどんなに吳れたつて、着物を脫がないに定まつてゐるわ。

エロオ　とは思へないね。

ロザリイ（ジヤンヌに）　何故あたしが着物を脫がないつて云ふの？全體あたしの脚が蟹股だとでもいふの？それともあたしのお腹がだぶついてゐるか、それとも妾の背中の骨があんたのみた

いに飛び出してゐるとでも云ふの？

ジヤンヌ　お氣の毒さま、あたしの背中の骨がどんなだかはパリ中の人が知つてるわよ。

ダントン　ジヤンヌ、お前は偉いよ。

ジヤンヌ（ロザリイに）　あたしの背中のことなんかガア〳〵云つてる暇に自分のことを考へるがいゝわ！だつて去年までまだねんねえだつた癖に、今ではもう無花果の葉つぱのやうな顏をしてるよ。

（ダントンとエロオ大聲に笑ふ）

エロオ（ロザリイに）　その無花果の葉つぱを使はないかい。

ロザリイ　それだけは御免蒙むるわ、あたし。

ダントン　さあ〳〵文句は止めて、飲め！

エロオ　早速薔薇の冠を註文しやう。

ダントン　いや、オレンジの花がいゝ。蠟で拵へた奴でいゝさ。（ジヤンヌの手をとつて愛撫する）

ジヤンヌ　蠟細工の冠なんてお葬式にしか使ひやしないわ？

ダントン　その通りだ。俺達が死人でないと云ふのか？この優しいアトラスをごらん、この青い

血管をごらん。この血管がやがて蛆虫の通ひ路になるつてことを考へてみたことがないのか？

ジヤンヌ（手を引張つて）　放して頂戴。

ダントン　此處でかうして坐つてゐる俺達は四人とももうとつくに死んでゐるんだよ、ジヤンヌ、お前それを知らないのか？俺達はたゞ人生の幻をみてゐるだけなんだ。人々の言葉をお聞き、聲の響をお聞き、太陽の光をごらん！お前、人の聲が何處か遠くから響いて來るのが聞えないか？なにもかも夢さ。

エロオ　だから、酒と戀よ、萬歳！

（ラクロア登場。近くの小卓に倚りかゝつて、氣遣しげにダントンを眺める。）

ダントン　酒とお前の溫い肌にはどうも迷はされるよ、ジヤンヌ。

ラクロア　今日は、ダントン。

ダントン　いよう、今日は、今日は、ラクロア。

ラクロア　倶樂部で君のことが話題になつてゐる今日、パリ中の人目につく處で阿魔つ子どもを相手に飲んだくれてゐられる場合ではあるまいがね。つい今しがたも彼處の門の所で二人の勞働者が君に後指を指してゐたぢやないか。

ジヤンヌ　ね、歸つたほうがよかあない？

ロザリイ　さう云ひなさいよ、すぐ行つちやいませう。

ダントン　まあ坐つて飲むさ、ラクロア、君は坐り込んで佛頂面をしてゐたね。さあ、俺をタルペイアの岩から投げ込んでくれ！ジヤンヌ、俺と一緒に死なうか。これも夢みたいなものさ。酒も、接吻も、死も。

ジヤンヌ　あたし泣きたくなるわ。

ラクロア　濟まんが君、ちよつと。（ダントン立ち上つてラクロアの傍へかける。）非常に重大な話なんだ。僕はジヤコベン倶樂部からぢかに來たんだがね。レヂヤンドルはのらくら者や金持どもを屠ることを訴へた。コロオ・デルボアは其の連中の名前を讀みあげろと要求した。リヨン派は途方もない宣言をよみ上げた。その宣言から厚ぼつたい血が滴り落ちた。かうしたことは凡べて、ロベスピエールに奴の獵犬を放つ絶好の機會を與へたんだ。

ダントン　誰に對してだ？

ラクロア　君に對してさ。

ダンドン　ホーオ、到頭そんな勇氣が出たのか？

ラクロア　奴等自身も恐慌を感じてゐるんだ。奴等は自分の命が奪られやしないかと慄へてゐるんだ。奴等はフランス全體が慄へ上がる位の血を民衆の面へ投げつけねばならないんだ。でなけや公安委員自身が街燈の下へぶら下げられることになるからな。奴等は非常に重たい頭を斬り落さなければならないんだ。

ダントン　そんな勇氣は出まいよ。

ラクロア（手を叩いて）　君は眠つてゐるのか、それとも病氣なのか？奴等はどんなことでもやつてのけるだらう。奴等は革命の激流に押流されてゐるんだ。奴等は道を遮るものは何でも構はず打ち壊してしまふんだ。君は、革命の先頭を切り、革命の憧憬と革命の目的とを豫め準備したもののみが革命を支配してゐるんだといふ事を今まで理解してゐなかつたのか？ロベスピエールは革命を支配した。なぜなら彼奴は革命の先頭に立つてゐるからだ。奴はなんだか或る激流の頭のやうに前の方へ吹つ飛んでゐる。ところが君は、どうだ、ダントン、君は停つてしまつた。波の最中へ捲きこまれて了つた。そして君は、君の脚下で波が碎け散るのを望んでゐる。君は押し揉まれ、引つくり返され、さうして情容赦もなく踏み躙られるだらう。民衆は變節漢、裏切者として君のことを書き殘すだらう。君は單なる無用な遺物に過ぎなくなるだら

う。

ダントン　民衆は小供のやうなものさ。或る物の中に何が入つてゐるかを知るためには、其れを壊してしまうんだ。天才を記錄するためには、民衆は豫め其の天才を死ぬまで苛まねば承知しないんだ。カビの生えた眞理だ！どうだ、酒は

ラクロア　ロベスピエールは、君が共和國を、民衆を裏切り、投機と遊蕩に身を持ち崩してゐると言ふんだ。パリが飢えてゐる時に、君は酒宴を催したと。

ダントン　どんな議論にだつて部分的に眞理があるさ。ラクロア、どうも今日はソクラテスのやうな話し振りぢやないか　どうも話が理に落ちちやつたな。ジャンヌ、此方へおいで、エロオなんか放つといて。（彼女が膝の上へ掛けさせる）どうもお前にはほんとうの哲學的思想といふものがないんだな。お前は小綺麗な横顔だの、甘い眼付きだの、ほつそりした手だのを好いてゐる。だが其れはたゞお前の苦勞を增すばかりさ、お前の惚れた男が美しければ美しいだけ、後でお前は苦しむんだよ。いゝか、まあお聞き、人間てものはどんな風に愛されねばならぬかといふことを教へて下げよう　沈み行く太陽を愛するんだ。物凄い偉大な太陽は空半ばのを血の色で彩る。その時、空には夕燒の奇蹟が始まるだらう。死の間際の太陽を愛するがいゝ。瀕死

の重傷を負つた獅子を愛すがいゝ。死の前に獅子は遠く〳〵の駝鳥どもまでが砂の中に頭を隱し、鰐魚の群も打ち戰くほどに吼えるであらう。

エロオ　素敵だ！うまく云つた！

ダントン　えさうさ、革命の四年間には誰だつて何かしら習へる筈だよ。

（ミイエとリユシイ登場。カミイエはダントンの方へ歩み寄り、片手をダントンの肩にかける。）

カミイエ　ちようど今ロベスピエールと話をして來たんだがね。（ダントン立ち上つて、カミイエと共にリユシイの方へ行き、その手に接吻をする。）

ダントン　美しきリユシイよ、パリの誇りよ、共和國の華よ！

リユシイ　あたし心配で心配で仕方がないんですよ。

カミイエ　ロベスピエールは共和國を維持するためには如何なる犧牲も辭しないと云つたぜ。自分自身であらうと、兄弟であらうと、友人であらうと。

リユシイ　私何かをやらうと決心した時のあの人がどんな人であるかを知つてゐます。あの人の話し振りは、冷たい落着いたものでした。そして非常に蒼い顏をしてゐました。

カミイエ　ダントン、君は彼等を訪問すべきだ。

ダントン　ロベスピエールを訪問しろつて？何のために？

リユシイ　貴方は告發の證しを立てなければなりませんわ。貴方には御自分を危險に陷れる權利はありません。私の良人の命を危險に陷れる權利はありません。

カミーエ　リユシイ！

リユシイ　いゝえ。女として云はなくてはなりません。餘計なことかも知れないけれども、私の良人は全世界よりも、共和國よりも私にとつて大事なんです。

カミーユ　リユシイ、何を云ふんだ、お前！

リユシイ　ダントン、この人を助けて下さい、ダントン！（ダントンの前に跪く）

ダントン　リユシイさん、貴女の美しい眼を涙で曇らせないためなら、私はどんな事でもしませう。

リユシイ　有難う、ほんとに有難う……。

カミーユ　ぢや君は、ロベスピエールと會見する決心をしたんだね？

ダントン　君の細君に約束したからね。

（小卓へ寄る。カミイユとリユシイ去る。）

ラクロア　君は彼奴の所へ行くことに決心したのかい？

ダントン　さうだ！

ラクロア　君は氣でも違つたんだな？ロベスピエールの所へ行くなんて、君の無力を認めるなんて、憐みを乞ふなんて！

君は自分で自分の死刑宣告書を書くやうなもんだ。

ダントン　なるほど、さうかも知れないね。

俺はこの男があんまり醜惡なものになつたら其奴の息の根を止めてしまふだらう。俺の盃はどこだ？

ロザリイ　まあどうしたの――冷めたい手をしてるわね。

ジヤンヌ　あゝ、私いくらか判りかけたやうだわ！

ダントン　死ぬ時になりや何もかも判るさ。だから今は苦勞なんかしないで、まあ飲め。畜生め！

馬鹿々々しい無駄話でずいぶん時間を損しちやつた。政治の話なんか、どうせ碌なことがないに定まつてゐる。（懷中時計をみる）一時間も經てば歸つて來る。お前達待つてるんだぞ。

ラクロア　（ダントンに續いて行きながら）一緒に行つてもいゝか？

ダントン　君は君の備忘錄の中へ此の歷史的事件の起つた時の日と時間、星と太陽と月の位置を記錄して置きたいんだね？偉大なるダントンがロベスピエールのお邸へ恭々しく伺候した時のね。

――（幕）――

第五場

ロベスピエールの部屋、質素な非常に無默のない家具。非常にさつぱりとしてゐる。書籍と書類を積み重れた書棚。

其方此方にロベスピエールの肖像及び胸像。ロベスピエールは書きもの机に向つてゐる。ダントンが兩手を胸に組んで其の前に立つてゐる。

ロベスピエール　共和國の敵はまだ絶滅されてゐない。後から〳〵と死刑にされる奴が出て來る。まだ平和に安んずる時ではない。

ダントン　自己僞瞞だ、血の幻影だ——敵だつて！フランスの住民全體を絶滅して見給へ、それでも最後の人間は君にとつて怖るべき敵として現はれるだらう。ギロチンは動く敵は生れて來る。いつまで經つても同じ事さ、テラアを止めなくちやならん。

ロベスピエール　テラアを止めるどころか、たゞ一日たりとも其奴を弱めることは出來ない。革命はまだ終つたのではない。

ダントン　嘘だ！ヂロンド派と協調派が崩壞した時、フランスには既に敵は殘つてはゐなかつたのだ。革命は終つたのだ。

ロベスピエール　なるほど君の云ふ通りだ、ダントン。我々がヂロンド派と協調派の首を斬り落した時に、政治革命は終つた。だがそれは政治革命の終つたすぐ後から始まつたものに比べるならば、ほんの小供の遊戯に過ぎなかつたのだ。

ダントン　勢力爭ひのことか。

ロベスピール　いや違ふ。僕は政治的鬪爭の終ると共に國内で始まつた社會革命のことを云つてゐるんだ、ダントン、君には此のことがどうしても理解出來なかつた。君は既に久しい前に終り、そして衰頽した政治革命の頂點に立つてゐた。君は最後のロマンチストであつだ。君は王宮を攻擊したパリの群衆の勇士であつた。君は民衆のカーニヴアルの赤い焰によつて盲目にされてしまつた。さうだ、君は革命を、暴動を、陶醉を、血を、松火を、劍戟の響を讃美する……。（ダントンは腹立たし氣に咳き兩手を解く。が、すぐにまた胸の上で組み合はせる。）ところで今、血のカーニヴアルは終つた。君は滿足し、疲れてゐる。そして君は、革命のお祭り騷ぎを經驗した國内に今や苛責なき嚴肅な勞働が始つてゐるのを見ないのだ。今や、眞實な平等と自由と友愛との爲めの倦むことなき無慈悲な鬪爭が始まつてゐるのだ。

ダントン　民衆には平和が必要だ。フランスは理論的公式のお蔭で惱まされてゐる。君は理論拘

泥主義者だ。フランスは生活を欲してゐるんだ。

ロベスパエール　民衆はその生活から幾千年來の不正義の巨大なカサブタを取り去らねばならない。民衆の頭上にたゞの一つの頭でもなほ聳えてゐる限り、民衆は神聖な平等のために戰ふことを止めないだらう。

たゞ、社會的平等に於てのみ、階級身分の撤廢に於てのみ、勞働の平等な分配に於てのみ、富と社會的奴隷性の廢止に於てのみ我々は幸福を獲得するだらう。卽ち、友愛を、そして精神的開明を、卽ち自由を獲得するだらう。フランスは第二のスパルタになるだらう。而かも奴隷のないスパルタに！その時こそ、正義と高邁なる德の黃金時代が實現されるのだ。

ダントン　君はその時代まで生きてゐるつもりか。

ロベラピエール　いや、僕は正義の黃金時代を見ないだらう。

ダントル　だが君はそれを信じてゐるんだね？

ロベスピエール　さうだ、僕は信じてゐる。

ダントン　（哄笑）君は、この部屋の中にゐながら革命の繰り人形を仕掛けの糸で動かし、數千年來のカサブタを取り除き、群集の波を指導し、黃金時代の殿堂を建設するなんてことを相も變

らず信じてゐるんだな。君は歷史の法則を揑っち上げ、公式を引つ張り出し、時間の限界を勘定してゐる。數學だ、論理だ、哲學だ！ま、なんて自惚れの强い男だ！君がその小綺麗なフロック・コオトを着て社會革命の嚴格な敎師よろしく街を通る時、街の人々は君を指さして云ふだらう。『ほら、アラスの代議士偉大なロベスピエールだ。ほら、あの人はあらゆるパン屋の首をチョン斬つて俺達にパンを只で分けてくれるだらうぜ！』と、だが氣をつけ給へ！君が一寸でも公式を問違へたり、たつた一つの數字でも問違へやうものなら、そしてパン屋を縊つてはならないといふことが明かにならうものなら、群集は君を八つ裂きにして、君の五臟六腑に唾をはきかけるだらう。間違ふなよ、ロベスピエール！ロベスピエールさう怒るやうぢや君の負けだね。君のやうな享樂的な人間は正に革命を情婦かなんかのやうに可愛がるが、飽きが來るとそれを足蹴にするんだ。君のやうな人間は革命に於ける論理と道德的純潔とを毛嫌ひする。なるほど僕は誤謬を犯すかも知れない。そして破滅するかも知れない。だが僕は最後まで正義のために戰ひ、革命の最高の叡智を信じることを止めはしないだらう。君と僕とは別な時代の人間だ。君は初めのうちは必要な人間だつた。ミラボオヒダントはフランスを燃え立たせ、革命の火の手を上げさせた。その時は、狂人のやうなロマンチックな英雄が必要であつ

た。だが今日の英雄は、民衆だ、國民だ、人類だ！個人的利益の權利を主張することは罪惡だ。繰り返して云ふ、大なる平等のために君は、君自身を忘れるべきだ、ダントン！君の豐かな財產を分配し給へ。君の惡德と感傷に打ち克ち給へ。ダントンであることを止め給へ。僕は打ち解けて君に云つてるんだ。君の功績には絕大なものがある。君がアトランタのやうにフランスを君の双肩に擔つて、奈落の淵から救い出した時もあつたではないか、僕は君を看守つてゐた。僕はひどく心配した。そして僕の心配は杞憂ではなかつた。君は今、血と肉に滿腹しきつて寢轉んでゐる。君の天才も、君の力も、喰ふことの樂しみの中へ溶け込んでしまつた。君の精神は消えてしまつた。君は君自身を木偶坊にしてしまつた。やがて、やがて君の肉體は鼻もちのならぬ惡臭を出し始めるだらう。ダントン、時期によつては木偶坊になるといふことが國家的裏切りになるんだ。

ダントン　君は氣でも違つたのか、それとも醉つ拂つてゐるのか！

俺に對して何といふ言ひ方をするんだ？俺が君に憐みを乞ひに來たとでも思つてゐるのか？

ロベスピエール　さうだ。ダントン、君は憐れみを乞ひに來たんだ！

ダントン　俺は君や委員會全體を腐つた蕪のやうに踏み躪つてやるぞ！俺の背後には民衆がある、全フランスがある！

ロベスピエール　君は間違つてゐる。君の背後にあるものは……。

ダントン　なんだ？

ロベスピエール　君の背後にあるものは——死刑執行人だ。

ダントン　（哄笑）死刑執行人！君はそれを確信してゐるのか？いやはや君は勇敢だよ、ロベスピエール！いゝか、君は一度でも生きるといふ言葉について考へたことがあるか？ところで云つて置くが、俺は生きることを欲する。俺の邪魔をしないでくれ。俺は自分の手を汚したくはないんだ！俺はもう血を見たくないんだ。殺人には飽き〳〵した。もし俺に君の理論を搔き交ぜて貰ひたくないなら、もしも君が唯一の獨裁者でありたいと思ふなら、どうとも勝手にしろ！だが、革命はそつとして置き給へ。あんまりひどく拍車をあてないがいゝ。さうでなくつてさへ、君はもういゝ加減こいつを痛めてゐるんだから！

ロベスピエール　では、これで話は終つた。（立ち上つて扉をあける。）どうぞ！

ダントン　（ロベスピエールに近づき、フロックコオトの袖を摑む）君は歷史の車をもつと簡單に廻轉させることが出來るのを考へてみたことがあるかい？

ロベスピエール　（冷かに）そいつは君には出來まい。

ダントン　俺に出來ない？

ロベスピエール　さうだ、出來ない！

（セン・ジユスト登場）

サン・ジユスト　おや、一人ぢやないんですか？

（ダントン、ロベスピエルールを放す）

ロベスピエール　セン・ジユスト待ち給へ

ダントン　議會でまた會はう！（去る）

ロベスピエール　（セン・ジユストに）丁度いゝ所へ來てくれた。僕はもう一寸で窒息してしまふところだつた。あの汚ならしい獸から惡臭と、我慾と腐敗とを吹つ掛けられたんだ。なにが民衆の指導者だ、惡黨め！セン・ジユスト、あの男があんまり大きい影を俺に投げかけたと人は云やしないだらうか？偉大な圓柱だ、ダントンは！えい糞つ、だが君は僕を信じてくれるね？君には判るだらう——僕が無慈悲であらねばならないつてことを。

セン・ジユスト（冷かに）えゝ、僕は貴方を信じてゐます、ロベスピエール。

ロベスピエール　ねえ君、僕には眼に見えるやうな氣がする——あの男の切り落された首からどんなに血が流れることか、どんなに血が流れることか！……僕はその爲めに權力に憧れたんだらうか？君は實際僕をよく識つてゐてくれる。君は僕を信じてゐる。僕は日の出と共に起きて、小鳥のさへづるのを聽く、その時僕は麥の束と鎌だけを手に持つであらう、想像も出來ない幸福な人々のことを考へ出すのだ。僕には、涼しい影を落すさはやかな森や、元氣な子供達や、手に藁束と鎌を持つたきれいな女達や、鋤を押して行く男達の姿が目の前に浮んでくる。平和と繁榮が支配するだらう。さうした豐穗な田圍が、曾ては血をそゝぎかけられたものだといふことを誰も思ひ出さなくなるだらう、セン・ジユスト、この幸福を實現するために、この夢を實現するために、僕は自分のすべてを投げ出してゐるんだ、それに違ひないんだ。僕は幻から自分自身を引きはなす、手を延ばす、と、書類に觸れる、その日死刑を執行されるリストだ。僕は立ち止ることは出來ない、前へ〳〵と行かなければならない。毎朝、フランスの地面は僕の心臟の血で眞つ赤に染るんだ。

セン・ジユスト　私の前で辨明するには及ばないでせう。

ロベスピエール　だが、センタントヌワ區でさへ、勞働者は死刑囚の車を見てブツ〳〵不平をこ

ほしてゐる。何かしら或る期待と恐怖とが全市を包んでゐるんだ。多くの者が自分自身を告發してゐる。僕達は怪物の首を切り落すとそのあとへあとから〳〵と新らしい怪物が成長して來るんだ。反革命はペストのやうにフランス全體を捕虜にしてゐる　あらゆる人間の眼を見給へ——至る處で君はあらゆる人間に發狂の火の粉が燃えてゐるのを見るだらう。我々の勝利へ日々屍がさへぎつてゐる。屍が、屍が……

セン・ジユスト　あなたは氣病です。少し休息した方がいゝでせう。

ロベスピエール　いや。猶豫は、停止は、あらゆるものの死滅だ。(間)だが、僕は決心がつきかねる。

セン・ジユスト　(鋭く)ダントンは死刑に處せらるべきです。

ロベスピエール　さう思ふかね？セン・ジユスト、僕達はそのことを冷靜に實行しなければならん。我々の革命の五年間は實にあの男に負ふてゐるのだ。成程あの男は有害であり、醜惡だ。だが、あの男には燃えるやうな熱がある。革命の神聖な熱狂がある。我々は、我々自身の若さを死刑にすることになりはしないか。過去との結びつきを引き裂くことになりはしないか。このことをよく考へて見なければいけない、あの男は、闘はずにむざ〳〵と自分を投げ出すやう

なことはしないだらう。

セン・ジユスト(一枚の紙を差し出す)眼を通して下さい！

ロベスピエール　何かねそれは？

セン・ジユスト　問罪表です。

ロベスピエール　(讀む)ダントン。

セン・ジユスト　陰謀の首かいです。

ロベスピエール　エロオ・ド・セシエル

セン・ジユスト　惡德漢です恥知らずです。共和國の恥辱です。

ロベスピエール　ラクロワ、フイリポオ。

セン・ジユスト　公金費消者共です。國家の財寶をかすめ取つた奴らです。

ロベスピエール　カミーユ！あの男はちつとも危險なことはない！

セン・ジユスト　あいつはあんまりおしやべりをしすぎます。

ロベスピエール　カミーユ、カミーユ、革命の最も美しいひよこだ！

セン・ジユスト　僕はあの男が誰よりも一番危險だといふことを主張します。あいつには思慮が

ない。あいつは才子で感傷的で、まるで女のやうに革命に惚れこんでゐるのです。あの男は革命をしてゐます。革命にバラの花かんむりをかぶせてゐます。好事家で怠け者の彼は、ほかの者全部を集めたよりも、もつと國家の威信を毒してゐます。

ロベスピエール　よろしい！で、告發書は？

セン・ジユスト（原稿を渡す）これまで――まだ下書ですが。

ロベスピエール　よろしい見ておかう。行つてくれたまへ！僕は獨りでゐたいんだ。（セン・ジユスト去る）十四人！遂行しなければならん！無慈悲は歴史の法則だ。俺はたゞこの嚴格な役割を遂行する機關なのだ。恐ろしい、恐ろしいことだ――十四人！カミーユ、ダントン、カミーユ、カミーユ――（ゆつくり立ち上つて扉の方へ眼を向ける、（その顔にすさまじい色が表はれてゐる））行つてくれ、行つてくれ。僕にかまわないでくれ！俺はやらなければならん、わかつたか？俺はやらなければならん（間諜裏をつかんでしわくちやにする。そのしわくちやにした間諜表を握つたまゝ手を振り廻す。そして、うめきながらテーブルの傍に腰をおろす）俺はやらなければならん……

――（幕）――

第六場

ブルヴアール。ベンチの上にシモンが新聞を持つて腰かけてゐる。少しはなれた横の方で物賣り女が小さな車の上でいんげん豆を賣つてゐる。

物賣女　（叫ぶ）青いんげん、いんげんはいかが、いんげん……

肩掛した女　一斤いかほど？

物賣女　自分で勘定なさい！あたしやこれでもう八百フラン賣つたんですよ。ところがそのお金をみんな投げ出して娘のスカートにするカシミヤと靴下とブドウ酒とを買はなきやならないんですからね……それだけでもつ、もうけはすつかり無くなつてしまふんですよ。だのにあたしやまだバトと鹽を買はなきやならないし、それにあたし達はもうまる二週間もパンを一切れも見ないんですからね。くらし向きは毎日々々ひどくなる一方なんですよ。

肩掛をした女　あちの子供は昨日からなんにも食べないんだよ。ね、いくらかまけて貰へるんでせう？

物賣女　お氣の毒さま、まけられませんよ……さあ〳〵そこを退いて貰ひませう！

女　誰もかれもかうしてう飢死してしまふんだよ。

跛の女　お前さんの自由つてのは飢死するつてことさね。

女　それに私達の職業に精を出すことさへ許されないんですからね。わたしや、たとへ首を切られたつて男たちをうちへ引つぱつて行かずにやおきませんよ。わたしや食べたいんですからね。私達はみんな飢死して亡びてしまふでせうよ。

跛の女　今にあいつらの番がくるさ、まあ見ておいで。

物賣女　（跛の女のスカートをつかまへる）お待ち！わたしやお前さんの顔に見覺えがあるよ。

跛の女　はなしておくれ、はなしておくれ！

物賣女　あたしやこの女を知つてゐる。この女は貴族だ。さあ皆つかまへておくれ！

シモン　（寄つて來る）何をがあ〳〵ないてゐるんで烏共？どうしたつてんだ？

物賣女　役人を呼んで下さいよ！あたしや立派な共和主義者ですよ。あたしやこの女をつかまへて欲しいんですよ。この女はもとのシエーブルモズ公爵夫人ですよ。この女の厩で、あたしの親戚の者が死ぬ程鞭でぶたれたんです。

跛の女　嘘をお云ひでない、嘘です、嘘ですよ！

シモン　はゝあ、また謀反だ！

女　あの人は嘘を吐いてゐるんですよ。あたしやこの跛さんには指一本觸れさしやしませんよ。この人に屑屋さんですよ。若し引つぱつて行くつていふんなら、あたしも一緒に連れてつて貰ひませう……

シモン　でお前さんは何だい？

女　淫賣ですよ。

シモン　へんこん畜生、手前達こゝで徒黨を組んでやがるんだな（二人の國民兵に手で合圖をする）おーい市民達。こいつらをコンミサールの處へ連れてつてくれ！（喧騒、雜鬪。二人の女は連れて行かれる。別の女が數名群の中からかけ出して來ていんげん豆の車を引つくりかへす。）

シモン　（かつらをかむつた市民に）これだから善良な市民はみんな晝も夜も街へ出て過さなきやならねえんでさあ。のべつ幕なしに反革命の謀反が燃え上つてるんだからね。ところでおめえさん今日の布告を讀みましたかい？

鬘を冠つた市民　どの？

シモン　（新聞を擴げる）貧乏は神聖なり、つて奴でさあ。神聖なる貧乏かーへ、なんて時代だ！哲學的時代つてやつさ！一番高尚な時代さ！

本を持つた市民　（鬘を冠つた市民に）ピエール行かうよ！

鬘を冠つた市民　何處へ？

本を持つた市民　革命議會へさ。今日はダントンの演説があるつて話だ。あの男の頭も風前の燈火つてやつでね。

鬘を冠つた市民　君は何の本を持つてゐるんだ？

本を持つた市民　アナクレオンの著作集だ。一七四三年に出版された一番きれいな本さ。余白に註釋がついてゐるよ（周圍を眺め廻て低い聲で）王の直筆の註釋なんだ。

鬘を冠つた市民　（本を受け取り泣き出して頁を開き接吻する）

本を持つた市民　氣がちがつたのか！（二人去る）

シモン　えゝい！こゝでもやつぱり萬年秩序通りにはいつてゐない。（二人の後をつける）

（覆された手車の傍へ肩掛を着た女が現れ、いんげん豆を拾ふ。ダントンが並樹の間から現れて彼女を見つめる。）

肩掛を着た女　（おびえて）此處には二斤ばかりしかないと思ひますが？

ダントン　さう、二斤以上はあるまい

肩掛を着た女　お金を車の上へ置いておきますよ。でも、あのおかみさんの言ひ値だけは置けません、そんなにお金は持つてゐないんですもの、子供がひもじがつてゐるんです。とてもお話にならない程ひどいくらしなんですからね。

ダントン　さう、今の時代は生活向に都合のいゝやうには出來ていないよ。あんたの言ふとほりさ。

肩掛を着た女　私別に不平は申しませんよ。私に不平を言へる權利があるでせうか？

ダントン　あんたは大變美しい。自分でそれを知つてゐるかね？

肩掛を着た女　何をおつしやることやら！私はもう自分の顏が分らない程こんなに醜くなつてしまいましたよ。たゞ、私の小さな娘だけが私を美しいと思つてくれます。有難う存じますさようなら。

ダントン　待ちなさい。（片手の指環をはづして女に與へる）これをあげやう。

肩掛を着た女　でもこれは、あんまりお高い品物ぢやありませんか。頂くわけには參りません。

ダントン　いや、私の記念のために、是非この指環を受取つて欲しい。あんたは獨り身かね？

肩掛を着た女　はい。夫は殺されました。

ダントン　戰爭で？

肩掛を着た女　いゝえ、罪もないのに殺されたのです、夫は詩人でした。生きてゐましたら。きつと非常に立派な詩人になつた筈です。私はあの人の死體を多勢虐殺された死骸の山の中で夜中に見つけたのです。ほんとに生きてゐましたら、フランスの誇りになる人でしだのに。

ダントン　それは『九月』のことかね？

肩掛を着た　あの人は『九月』の大虐殺で殺されたのです。虐殺者たちは、罰せられるに違ひありません。私にはそれが分ります。血が、あいつらの息を止めるでせう。あいつらが、あの晩地面へ炬火を打ちこんでゐた時、あいつらは死骸の上に腰掛けて、粉を混ぜながらブランデーを飲んでゐたのを私はちやんと覺えてゐます。あいつらは眞つ黑な恐ろしい顏をしてゐました。私はそれを忘れることが出來ません。

ダントン　眞つ黑な顏をしてゐたつて？

肩掛を着た女　あいつらみんな今に見てゐるがいゝ。あいつらの首領、あの化物め今に見てゐるがいゝ！

ダントン　誰だそれは？

肩掛を着た女　あなたはそいつの名前を知つておいでです。あいつはサタンのやうにその頃パリーの上を飛び廻つてゐたんです。

ダントン　あんたは何かね『九月』の大虐殺の發頭人がダントンだと、たしかに信じてゐるのかね。

（肩掛を着た女は立ち上り、物狂ほしさうにダントンを見つめ、それから不明瞭な叫びをあげ彼を押しのける。）

肩掛を着た女　おゝダントン！

（彼は並木の間へ姿を消す。ダントンその後を追ふ。カミーユとリユシイ登場）

リユシイ　あの方またどこかの女と一緒だわ。

カミーユ　どうも此頃、あの男は女に對して何だか不思議な慾望を感じてゐるんだ。自分の膝の上へ女達を坐らせて、まるでその女達の溫かみで自分を暖めやうとでもするやうにその手や、首や、顏や、眼を見つめてゐるんだ。見てごらん、何て重苦しい歩き方だ！なんて脊中を曲げてゐるんだ！何か知ら恐ろし　硬直に見舞はれてゐるんだ。

リユシイ　カミーユ、私今あなたを何時もよりずつと〳〵強く愛してゐます。私はあなたを泣きたいほど、身もよもあらぬ程愛してゐます。私は心配で〳〵なりません。

カミーユ　愛しておくれ、僕を愛しておくれリユシイ！僕たちは何處にゐても決して別れることはないんだ。（彼女に接吻する）

リユシイ　あゝあなた！

（ラクロワ登場）

ラクロワ　ダントンはどこにゐる？會議はもう始まつたんだ。萬事おしまひだ畜生奴！だから云はないこつちやない。ダントンは、あの大食漢はあの放蕩者は、ぐづ〳〵しすぎた、萬事おしまひだ。もう逮捕命令が出てしまつたんだ。ダントンに對する　僕に對する、君達全部に對する……今夜、十四人の人間が逮捕されるだらう。行つてダントンにさう言つてくれ給へ！僕は家へ行つて來る。どうとも勝手になれだ。死が來るなら來い。（リユシイ、氣絶して倒れる）

——（幕）——

第七場

同じ場所。ブルヴアールはランタンに照らされてゐる。並木の間から夕陽が燃えてゐる。ベンチの上にダントンが腰掛けてゐる。並木の後からルイズ登場。

ルイズ　あなたびく〳〵なさらなくてもいゝわ！（彼の横に腰を下ろす）あの人達、なたに手を出すやうな事は決して出來けやしませんわ。

ダントン　びくついてなんかゐるものか、落着いてゐるよ。

ルイズ　私今し方、リユシーの所にゐましたの。可哀相に、あの人泣いてゐるのよ。そして、カミーユにロベスピエールの所へ行つて下さいつて、一生懸命に頼み込んでゐるの。ロベスピエールはあの人達の子供の名付け親なんでものね。あゝあ何も彼も夢見たいな氣がする。

ダントン　さうさ、何も彼も惡夢だ。

ルイズ　あの人達の所にゐる時、誰か知つた人が訪ねて來ましてねその人の云ふには、巴里ぢゆうあなたを搜索してゐるんですつて。ね、何處かへ行つて了ひませうよ。

ダントン　俺は逃げ匿れようとは思はない。全くさ、外國へ逃亡したりなんか眞平だ。そんなこ

とをしたつて何にもならんさ。ルイズ、陽が沈み出した時、俺の影法師はブルヴァールの端の方まで長く伸びて行つたよ。俺はその赤味がかゝつた、化物のやうな影法師を長い間見詰めてゐたんだ。これこそ、俺の身體の本當の廣さ、大きさなんだ。とすれば俺は一體何處へ匿れることが出來よう？人間がこれ程の大きさに生長した時には、ぢつと動かずに立つてゐるしかないんだ。お前は何も彼も夢だと云つた。變なことだが、俺の身體が硬ばつて了つたやうなものだ――夢の中でだけ起きるやうに、俺は根を下ろしたやうなものだ道を歩く時、俺はやつとのことで靴の底を地面から持ち上げてゐる始末だ。俺にはたつた一つの望みしかない――地面に横たはつて眠り込みたいつてことだ。さうだよ、ルイズ、ギロチンの刃を外れさせるつてことは出來ない相談だらうよ。落つこちて來るものなら、俺の頸の上へ落つこちて來るだらうさ。

ルイズ　マリア樣があなたをお護り下さいますように。祈りませう、私と一緒に祈りませう！あなたは思慮が曇らされてゐるんです。

ダントン　子供の時に俺は所中お母と一緒に寢臺の前へ膝まづいて俺達の家族のためや、善い收獲のためや、貧しい人々のためや、王のためにお祈りをしたんだ。所で今俺は何のために祈つたらよいのだ俺は闇の中へ行つて仕舞ふのだ、永遠の闇の中へ。そして其處で俺は何にも記憶し

てゐる必要はない、何にも思ひ出す必要はない。此れがつまり死の甘さつて云ふものさ、何もかも忘れて仕舞ふつて云ふ事が。

ルイズ　でも貴君はせめて私だけはいくらかでも思出下さるでせう？何故私の手を押しのけるのです。私は貴君から離れたくありません。

ダントン　俺は想出に惱まされてゐる。こいつは毎日々々段々大きくなつて行くばかりだ。初め頃はそれとても大したものでは無かつたが今では、俺の腦味噌の中はそいつですつかり搔き廻されてゐるのだ。俺にはそいつらの恐れた足取りが聽える。ルイズ。そいつはまるで侵略者みたいなものになつて來た。お前が來る迄、俺は此處に坐つて注意してゐた――街は靜まり返つて、燈が灯つた。自分の心臟の鼓動が聞えた程、ひつそり靜まり返つた。俺の血が血管の中で、次第々々に音高く波立ち初めた。その脈膊の音は丁度群衆の漠たる不滿の聲に似てゐた。俺はその不思議な物音の中に物狂ほしい呻き聲や、叫びや、銅鐵の響きなどが含まれてゐるのを聞き別ける事が出來た。俺の血の中で九月、九月！と吠え喚いてゐる聲を聞き別ける事が出來た。何故あの九月は血まみれな手を俺の方に差出すのだらう！

ルイズ　貴君はあの時共和國が滅亡に瀕してゐたといふ事を忘れたのですか。

ダントン　いや、忘れはしない。俺は共和國を救つたのだ

ルイズ　あの時敵は國境を越えてパリーに向つて居ました。

ダントン　さうだ、グリンスウイツク太公とプロシア王がパリーに向つて居たのだ。

ルイズ　パリーは謀反人と裏切者とで一杯でした。誰も民衆を血だらけの虐殺から引止める事は出來なかつたのです、九月には唯貴君だけがフランスを救ふ事を念じてゐらつしたのです。

ダントン　嘘だ、嘘だ、嘘だ！少しも罪のない老人や、女子供か五千人も牢獄で斬殺されたのだ。あの連中の血が俺を息づまらせるのだ。ルイズ。一體人間を救ふためには人類の上へ人類自身の血を流さなければならないと云ふ事を誰が考へたのだ、俺はもう何も信じない、俺自身も、お前も、晝も、晩も、眞理も、虚僞も、何も信じない。ルイズ、俺を救つて呉れ（ブルヴアールの奥から人聲が聞えて炬火の圍りが見える。）

ルイズ　おゝマリア様、おめぐみを、おめぐみを、

ダントン　奴等は俺を捕へに來たのだ。家へ行かう、ルイズ。俺は宿なしの泥棒の樣に、逮捕されたくはない。

ダントンとルイズ去る。シモンと炬火を持つた兵士達登場、彼等と一緒に數名の市民）

シモン　俺はギロチンにかけて誓ふ——たしかに此處に居た筈だ！此方の方へ、彼奴の女房が走つて行くのを見た。おーい、ダントン！やい。えい、畜生。誰か酒を持つてる奴は無いか？喉が乾いて仕樣がない。だが、どつち道とつ捕へてやるんだ。生きて居やうが。死んで居やうが。若し奴をイギリスへ潜りこましたら、共和國はお終ひだ。やいダントン！

——（幕）——

第八場

革命裁判所。腰掛は聽衆に滿されてゐる。舞臺前面にフキエ・テンウイルが書類をめくつて居る、彼の隣りにゲルマン。

フキエ　ダントンをこわがつてゐるのか、君は？

ゲルマン　奴は自分を辯護するに違ひない、他の奴になら容易く打克つ事が出來るが。

フキエ　カミーユ・デムランはどうだ？

ゲルマン　此奴は怖くはない。

フキエ　奴の過去には功積がある。革命の火蓋を切つたのは彼奴だからな。

ゲルマン　革命をオジヤンにするのも彼奴だ。蛇は自分の尻尾を咬むものだ。

フエキ（書類を包紙の中に入れる）　議會ぢあ今の處、ロベスピエールの勝ちだ。あの演說と來たらとても素晴しかつたよ、とても。

ゲルマン　何の話しをしたんだ？

フエキ　ロベスピエールは原理の淸らかさ、精神の偉大さ、そして亦、革命が要求してゐる犧牲

に就いて話したんだ。話しが犧牲の事に及んだ時、ベンチにはちらつと恐怖の色が仄いた。代議士達は茫然としてそれに聞入り、誰も彼も若しや自分の名前が呼上げられはしないかと片唾を呑んで居た。ロベスピエールが唯ダントンとダントン一味の者共だけ引渡しを要求してゐるのだといふ事が判つた時には、議會はほつと吐息をつき、卑屈な、いまはしい拍手が始つた。歷史の中でこの上もなく大きな屈辱の瞬間だつた。續いてセン、ジユストが演壇に登り、氷の樣に落着き拂つて、哲學的な說明をした。人類は自己の運動の中で、常に屍を踏み越えて幸福に向ふものだ、といつた。これは自然の現象と同じ樣に法則的なものだ、セン・ジユストは議會の良心を安心させた。そしてダントンは首ごと我々に引渡された。事件はこんな風だつたのだ、併しそれは今の處、半ば勝利を獲たに過ぎない。ダントンは死ぬ迄陪審官を嚇かし、パリーの街々を自分の味方に索き付ける事が出來るだらう。若し陪審官達が無罪を主張したらどうする？

ゲルマン　そんな事考へられない。

フキエ　君は陪審官を信じてゐるか？

ゲルマン

僕は陪審官を籤引きで選ばずに最も有望なものを選んだ。

フキエ　信頼出來る連中かね？

ゲルマン　聾で、惡魔の樣に兇暴なのが一人。アルコール中毒が二人。――奴等は裁判の間中居睡りをして居て、たまに口を開くと思へば「有罪！」だ。もう一人貧乏な、怒りん坊のヘボ繪描きが居るが、革命裁判所から出てゐる道は唯一つギロチンだといふ原則をもつてるといふ奴だ。後の奴も彼同樣、有望だ、

フキエ　だが、民衆、は！見給へ、窓の下で何をしてゐるか。（彼等は窓際に赴く。フキエは煙草を嗅ぐ。）なあ、ゲルマン、若し牢獄の中でだ、一寸した陰謀でも起つたとしたらどうする？

ゲルマン　陰謀、牢獄の中で？

フキエ　さうだ。假りに、囚人達が監守を買收するとする。

ゲルマン　うん。

フキエ　民衆に金をバラまくんだ。街で裁判に反對した暴動を起さすために。

ゲルマン　うん、うん。

フキエ　そんな事があつたとすれば、最も重い刑罰に價すべきだ。

ゲルマン　さうだ。君の云ふ通りだ。

（延丁登場。）

ゲルマン　陪審官達は集つたかね？

下僕　全部集つて居ります、それに民衆がドアーを毀しかけて居ます。

フキエ　始めやうか？

ゲルマン（延丁僕に）　被告を連れて來て呉れ給へ、それからドアーを開いて

（坐席に着く間に聽衆で一杯になる、陪審員達が現れる。裁判所員達は各自の席につく。）

赤帽子の市民　共和國萬歲、革命裁判所萬歲！

聽衆の聲々　共和國萬歲！共和國の敵を殺せ！

民衆の聲々　共和國萬歲！

共和國の敵を殺せ！

黑帽子の市民　革命裁判所員諸君、俺達は死刑の宣告を要求する。

聽衆の聲々

——そんな事を怒鳴つた奴こそ死刑の宣告だ！——

——シッ、シッ！——

——誰だ、喋つた奴は？そんな事を云ふのは誰だ？

——陰謀を企んでるぞ！此處で！

——謀反人を殺せ！——

赤帽子の市民　ドアーをみんな閉ろ片つ端から搜索するんだ！

（聽衆の間に激動騷ぎ）

ゲルマン（鈴を鳴らす）　被告を連れて來給へ。

（聲々の叫び、鈴の響き。ダントン、カミイユ・デムラン、ラクロア、エロー、フイリツポ、ウエステルマン、その他が連れて來られる。）

黑帽子の市民　ダントン、名譽ある市民の贈物だ！（上から彼に唾を吐きかける。）

ダントン（聽衆に向つて）　見物して、樂しんで呉れ給へ。被告席の見世物はたんとは無いよ。

赤帽子の市民　民衆の金を掠めやがつたんだ、お前は！——勘定書を書いて見ろ。

聽衆の聲々

——泥棒、ほうとうもの！——

——人殺し、牛殺し、

——今度は自分の血を浴びる番だ——

九月を忘れやしねえぞ。九月を忘れやしねえぞ、俺達あ。

ゲルマン（鈴を鳴らす）　靜粛に願ひます裁判は開始されて居ます。（エローに向つて）被告の姓名は

エロー　エロー・ド・セシエル。

ゲルマン　年齡は。

エロー　三十七か三十八だ。俺の死んだ後で、歷史がちやんと說明して呉れるさ。

ゲルマン　職業は、

エロー　代議士、國會議員。貴婦人の手套の蒐集。（坐る。聽衆の間に笑ひ。）

ゲルマン（カミーユに）　被告の姓名は？

カミーユ（憤然として）　知つて居るぢあないか、人でなしめ！

フキエ　被告とは個人的に知つてゐる。名前はカミーユ・デムランだ。

カミーユ　フキエ、テンウイル、君は俺の名前を知過ぎて居るだろうさ、この俺が君を檢事の椅子につけてやつたんだからな。

ゲルマン　君の年齢は？

カミーユ　俺の年は有名なサンキユ・ロツト・イエス・キリストと同じだ。

聽衆の聲々

——ブラボー！

——甘い事をいゝやがつた！——

——おいゲルマン、何か聞いて見ろよ、もつと！

ゲルマン　職業は？

カミーユ（狂氣の樣に叫ぶ）　革命家だ愛國主義者だ、民衆の代辯者だ！

聽衆の聲々

——ブラボー、カミーユ、デムラン！

——あれの云ふ事は本當だ、俺達の辯民官だ。

——あれは善良な愛國主義者だ。

ゲルマン（鈴を鳴らす。ダントンに）　被告の姓名は？

ダントン　俺の名前は此處に居るものが一人殘らず知つてゐる。

聽衆の聲々

——ダントンだ、ダントンだ、靜かにしろ、靜かに！

ゲルマン　年齢は？

ダントン　三十五歳。

ゲルマン　職は？

ダントン　フランス共和國司法大臣、革命議會委員、社會公安委員會員。

ゲルマン　住所は？

ダントン　もうぢきに虛無が俺の住家になるだらうだが、俺の名前は歷史のパンテオンの中に住むだらう。

聽衆の聲々

——ブラボー、ダントン！——

——ブラボー、ダントン、もつとやれ！——

——ダントン、獅子の髮を搖ぶれ！——

——吼えろ！ダントン。

（裁判長鈴を鳴らす）

カミーユ　ゲルマン、もう一つ聞いたらどうだ、ダントンの口の中に何本齒があるか——

（聽衆の間に笑ひ）

ダンドン（手にして居た原稿で物杆を擊つ）　これが告訴の事實だ。何處かの惡黨が俺の名前に墨を塗り、讒言をしやうと一生懸命になつてやつたのだ。侮辱を蒙つたのは俺ではない、革命だ、歴史だ、全フランスがこの紙つ片れの圍りで横つ面を張られたのだ。

ゲルマン　靜肅にし給へ。ダントン、君はルイカペーの一味と往來して居る廉で告發されてゐる君は死刑に處せられた國王の機密費から金を貰つた。君は死んだミラボーと共謀し、專制政治を復活させようとした廉で告訴されてゐる、君はデムウリエ將軍と親交を結び、議會に反對して軍隊を煽動し、それをパリーに向けさせる目的を持つて、秘かに將軍と通じて居た廉によつて告訴されてゐる。立憲專制政治を復活し、オルレアン大公を王座に据える事が君の任務だつたのだ。

ダントン　大てたらめの嘘八百だ！

ゲルマン　これから告訴狀を讀み上げる。

ダントン　告訴狀はピンからキリまで嘘八百だ。俺は發言を要求する。

ゲルマン（銀を鳴らす）　君の番が來る迄發言を許さない。

聽の聲々

——云はせてやれ！——

——俺達は奴に話して貰ひ度いんだ！——

——畜生！形式張るない！——

——裁判長をやつつけろ！——

——革命裁判所が何だ！——

ダントン　俺を中傷した惡黨共、堂々と姿を現はせ。顏を隱さずに法廷に出て來い。俺は中傷を恐れない、俺は死を恐れない。俺を死刑にするがいい、その時俺の名前は光榮の神殿に運ばれるだらう。俺の樣な人間は一世紀に一人しか生れない。その額は天才の燒印で輝いてゐるのだ。俺を中傷した奴は何處に居るのか？（聽衆に向つて）諸君は此の俺を共和國を裏切つた者として責めるのか。（聲々の叫び）これが犯罪事實なのだ。此の俺をばリユウドヴイツク・カペエ宮殿に詔らう者として告發してゐる。此の俺をば裏切り者デムウリエと內通してゐる者として告發

してゐる。おゝ、サンヂエスト、お前はこの卑劣な中傷に對して何と答へるのか。（喝采）君達は俺の命を奪はうとしてゐる。俺の本能は我が身を守れと命令してくれる。俺は犯罪事實の總ての點を粉々に打碎いてみせやう、俺は君達を俺の功績の翼の下に隱まつてやらう。君達は俺の功績を忘れたのだ。考へても見給へ、ラファイエットがマルソウの原で君達を砲擊した時、專制政治に向つて戰を宣したのは此の俺だ。八月十日に俺はそれを破壞した。一月二十一日に俺は奴を打殺し、國王の血まみれの頭をヨオロッパの君主達の足下へ投げつけたのだ。――まるで手袋を投げつけるやうに。（聽衆の間に嵐の樣な喝采）

ゲルマン（鈴を鳴らす。）　君には此の鈴の音が聞えないのか。

ダントン　生命と名譽を防禦してゐる人間の聲が小さな鈴の響をかき消すのは當り前だ。さうだ九月に俺は民衆の憤怒の最後の浪を涌き立たせたのだ。民衆は狂ひ立つて叫んだ。その爲にブラウンシユツイクの大公は恐れおののいて巴里に向つて差しのべてゐたその手を引つ込めたではないか。ヨオロッパは打ち震えた。俺は貴族共の黃金で鍛えた武器を民衆に與へた。俺は二萬の革命的部隊を東方の國境に送つた。俺に向つて石を投げつけ得る者は誰か？

（喝采。叫び聲。人々はダントンに向つて花を投げかける。）

聽衆の聲々

――ダントン萬歳！――

――民衆の代辯者萬歳！――

――俺達は釋放を要求する！――

――ダントンを釋放しろ、ダントンを釋放しろ！――

――革命裁判所を倒せ？――

――裁判官をやつつけろ！――

ゲルマン　（鈴を鳴らす。）　十分間休憩します。

ダントン　民衆よ、俺を裁くのは君達自身だ。俺は俺の生命を君達の裁判に任せる、正義に任せる。（喝采、叫び聲。）

――幕――

第九場

革命裁判所前の空地。公判第三日目。晝食事の休憩、窓を通して守衛が法廷を片づけてゐるのが見える

シモン（空地に現はれる。窓を覗いて看守に。）　おおい！パアシエン。

守衛（窓から顔を出し）　何だ？

シモン　たつぷり喰つて來たよ、あの街角のカフエでね。

守衛　知つたこつちやあねえさ、お前が腹一杯喰つたつて。

シモン　そんなことを言つてるんぢやないんだ、パアシエン。俺は裁判所に入れてくれないか爺さん。先には入つて近くのいい場所が取りたいんだから。

守衛　どうも具合がよくねえんだ。裁判官がまるでおびえ切つてゐるもんでダントンは勝手氣儘の事をするんだ。

シモン　ダントンの吼える聲はセーヌ河の向ふ岸でも聞えるよ。全民衆はダントンの味方だ。コムミユウンも亦ダントンの味方だつていふ譯さ。

守衛　でまるで、ダントンが裁かれるんぢやあなくつて革命裁判所がダントンに裁かれてるやうなもんだ。

シモン　打明けていふがね、パアシエン、俺はもう何が何やら譯が譯らないよ誰に味方したらいいのか、ダントンにか、それともロベスピエールにか？ダントンは民衆の友だ。ロベスピエールも亦民衆の友だ。それに俺は兩方とも大好きなんだ。併し何故だか解らないが、二人の中のどつちかが首をはねられなけりやならねえんだ。俺の身にもなつてくれ、パアシエン。俺は晝飯の前に二三杯引つかけて來たんだが、それでも一向胸のかたまりが下りねえんだ。二人の中のどつちの首をはねていいのか決心がつかねえんだ。俺の愛國主義はどうしていいかうろうしてゐるんだ。

守衛　うん、は入るがいい。通してやらう。（レモンは入口の方に歩いて行く。やがて窓越しに聽衆席には入つて行く彼が見える。コロオとフキエが空地へ現れる。）

コロオ　ダントンの勝利は革命の敗北を意味するものだ。ダントンは停止してゐる。ダントンは消化しちまつた過去の革命だ。どんな犧牲を拂はうと、奴を投り出してしまはなくちやならない。例へ双にかけてでも。

フキエ（煙草を嗅ぐ。）　被告共は國會議員及び公安委員會員を法廷に召集する樣に要求してゐる、

コロオ　だがそんな事をすれば我々の滅亡だ、そんな事を許す事は出來ない。

フキエ　それは奴等の權利だ。法律はそれを拒絶する力を持つてゐない。

コロオ　もつと證人を突ついてみたらどうだ。

フキエ　證人の取調は全部濟んでゐるんだ。

コロオ　新しい證人を探し出し給へ。奴等に金を拂つてやるんだ。今は俺達の首が危ない時なんだ。一言に付き千法づつ拂つてやり給へ。

フキユ　ダントンはいつも民衆に向つてものを言ふんだ。法廷の騷ぎの爲に記錄を取る事さへ出來ない裁判官達は石の樣に默つて坐つてゐるんだ。ダントンやカミーユやラクロアの罵倒振りときたら女達が喜びのあまり金切り聲を出して呼ぶ位だ。（煙草入れを出して）どうだ。こんな公判を始めた事がそも〳〵間違ひだつたんだ。

コロオ　俺はロベスピエールに言つたんだ――待つた方がいいだらう。君は餘り早く戰を始め過ぎた。民衆は未だ無政府狀態の中をさ迷つてゐるんだ。鐵のやうな國家權力の思想は未だ大衆の支持を得てゐない、つてな。

フキエ　で、何て答へたね、ロベスピエールは？

コロオ　ロベスピエールは何時もの調子でフロックコオトのボタンをすつかり合せて、默つて自分の部屋に閉ぢこもつてしまつた。

フキエ　或は奴が正しいのかもしれない。

（サンジエスト登場。）

サンジエスト　君を探してゐた所だよ、フキエ。たつた今リユクセンブルグから通知が來た所だ牢獄の中に陰謀があるんだ。ダントンとデムランの細君が計畫を立てて民衆に金をばらまいたんだ。看守達は買收されてゐる。牢獄をぶつこわす準備が出來てゐる。その上噂に依ると議會まで爆破されるかもしれないといふのだ。

コロオ　俺達は助かつた！

フキエ　證人がゐるのか？

サンジエスト　十八人も逮捕されてゐる。だが當分何にも言はないでゐて呉れ。俺は議會に行つて來る。そして公判は傍聽を禁止して續けるやうにといふ命令を早速出させる樣にする。

フキエ（煙草入をパチンと閉め乍ら）　さうだ、死刑の宣告だ。

――幕――

第十場

一時間後の同じ場所。棚のわきに民衆が密集してゐる。法延の裁判官被告及び聽衆の一部が窓越しに見える。

ダントン（その全身が窓の中に見える。）　諸君は眞理を知らなければならない。獨裁政治がフランスをおびやかしてゐるのだ。野心家と惡黨の一隊が共和國に向つて鐵の拘束を投げ與へやうと望んでゐる。人間の凡ての自由、凡ての眞理、革命の勝利は此の上もない危險にさらされてゐる。俺はロベスピエール・サンジエスト・クウトン及びコロオ・デルボアが獨裁政治を望んだかどに依つて奴等を告發する。俺は奴等を國家を裏切つた者として告發する。奴等は共和國を血の海に沈めやうとしてゐるのだ、議會を追放しやうと欲してゐるのだ、そして更に獨裁政治の根を固めやうとしてゐるのだ。民衆よ、君達はパンを要求してゐる。だのに君達に與へられるものは君達の護民官の首なのだ。君達は餓え飢えてゐるだのに君達はギロチンの階段の血汐をなめさせられてゐるのだ。

群集の聲々

——獨裁者を葬れ！——

——獨裁者をやつつけろ！——

さうだ　やつつけろ！——

——ダントン萬歳！——

一人の聲　ダントンの言ふ通りだ。俺達は酒の代りに血を飲まされてゐる。俺達はパンの代りに切り落した首を貰つてゐるのだ

女の聲々　パンをくれ、パンを、パンを！

一人の聲　市民諸君。行かう、裁判所の奴等をやつつけやう。

——市民諸君、合言葉はかうだ。——ダントンとパンを寄こせ！

聲々

——ダントンとパンをよこせ！——

——ダントンとパンをよこせ！——

——ダントンとパンをよこせ！——

（群衆は雜沓する、數名の兵士がそれを障らうと努める。）

ダントン裁判官に叫ぶ。）　惡黨共！聞け、民衆が何を呼んで居るかを！自分の首の根を確つかり

壓へて居るがいゝ。

カミーユ（裁判官に叫ぶ。）　我々は特別委員會を要求する。

ゲルマン（亂れた鬘を押へ乍ら、鈴を鳴らして）　靜肅に靜肅に法廷に對して導敎の念を抱いて下さい。

ラクロア　これは法廷ではない、買收されたペテン師共の集りだ。惡黨、默まれ

カミーユ　ゲルマン、鬘を治したらどうだ。インキ壺の中に落つこちるぞ。

エロー　裁判長、鈴を鳴らすのは止めてくれ耳が割れさうだ。

ダントン　俺は命令する、こんな忌はしい喜劇は止めにしろ！

カミーユ　委員會が招集されるまで會議を中止する事を要求する。

ラクロア　裁判を中止しろ！

（騷ぎ、裁判官達は浪敗し、被告は立上る。群集は窓際に押し寄せる。）

ダントン　民衆よ、君達は僞かれ通して來た。併し我々はよい時に恐る可き陰謀を暴露したのだ

聲々

——ダントンを釋放しろ。——

——裏切者を倒せ　窓を毀しちまへ！——

（この時、群衆の間をかき別け乍ら、コローが裁判所の方に向ふ。）

コロー　道を開けて呉れ、道を、道を。議會の命令だ、議會の命令だ！

（法廷に入つて行く。）

群衆の聲々

——ありやコロー、デルボアだ！

——情知らずだ！

——議會の命令だと云つてたぞ。

——亦、何か淺ましい事が起つたに違ひない。

——民衆に敵對する新しい陰謀なんだ。

——一つ穴のむじなだ。無頼漢情知らず！

——だが俺達はどうだ。パンも無しに坐つてゐるんだ。

——パンをよこせ、パンを、パンを。

——ダントンを釋放しろ！

フキエ（コローから書類を受取る。）　議會の命令です！（突然、靜寂）議會が開催されました。リユクセンブルク監獄の囚人の間で謀反が發覺したためであります、市民リユシー・デムランとルイザ・ダントンとが政府に對し反亂を引起す目的を持つて、民衆に紙幣を別ち與へたためであります、デイロン將軍が監守を買收し、脫獄して謀反人の頭目たらんと試みたがためであります

更に又、本公判の被告共がこの陰謀に加瞻し、屢々。法廷をば侮辱したがためなのであります

——革命裁判所は公判の續行を命令されて居り、若し被告が法律に對する當然の尊敬を拂はない時には、被告の發言を禁止する權利をも與へられてゐます。

ダントン　俺は抗議する。奴等は俺の喉笛を容易く斷ち切らんがために、この口を蔽ほうとして居るのだ。これは裁判ではない、これは殺人だ。

カミーユ　裁培官に向つて）　卑怯者、惡黨、奴等は俺のリユシーを切殺さうとしてゐるのだ。

ゲルマン　發言を禁じます。

カミーユ　默れ、（ゲンマンの面を目掛けて歇苦茶にした草稿を投げつける。）

ゲルマン　傍聽を禁止します聽衆諸君は退廷して呉れ給へ。

裁判所內の聲々

——恥辱だ！

——抗議する抗議する。

——出て行きあしねえぞ！

——命令の取消しを要求する！

——恥辱だ、恥辱だ、恥辱だ！

（兵士等が傍聽席の人々をどかせる。）

裁判所前の聲々

——市民諸君、これは一體全體何て云ふ事だ？

——何が裁判だ、人殺し同然ぢあ無いか。

——俺達を殺せ、俺達を銃殺しろ。

——俺達だつて、叩き殺してやらあ！

——ダントンを釋放しろ！

ダントン（窓邊へ飛んで行き、群衆に手を差伸べる。）　市民諸君、兄弟、衛つて呉れ、俺達は殺されるんだ！（激怒した聲々。）

ゲルマン　窓を閉めろ、カーテンを下ろせ！

延丁　がダントンを押のけて窓を閉めカーテンを下ろす。群衆の間に動揺、亂鬪絶望的な叫聲。法延内に居た民衆が扉から外へ流れ出る。）

赤帽子の市民（街燈の上に乘り）　市民諸君、聽いて呉れ、市民諸君――靜かに！諸君は知らうとは思はぬか、何故バリーにはパンがないのか？

聲々

――何を云つてゐるのだ彼奴は？

――何故バリーにはパンがないのか、つて云つてゐるんだ。

――靜かにしろ、奴はパンの事を云つて居るんだぞ。

赤帽子の市民　諸君に聞かう、何故、諸君は飢のために死に瀕してゐるのか？外でも無い、あの裏切者、ダントンが秘かにパンをイギリス人に賣渡したからなのだ。

聲々　嘘を付けダントンがイギリス人なんかにパンを賣つて堪るものか。

黒帽子の市民（外の街燈に登つて）　市民諸君、俺は疑ふ可からざる證據を握つてゐる、ダントンは裏切者だ。

赤帽子の市民　市民諸君、君達は虱に嚙まれてゐる。君達の着物は死人の着物同然、腐れ果てゝ

ゐるダントンはどんな生活をして居ると思ふ？

黒帽子の市民　ダントンはセーヴルで宮殿の樣な屋敷を買つた。ダントンは絹の肌衣をつけてゐる。

赤帽子の市民　ダントンは雉の肉を喰ひ飛切り上手の葡萄酒をあびてゐる。ダントンは白パンを獵犬に喰はして居るのだ。

聲々

――オー・オー・オー！

黒帽子の市民　ダントンも元は俺達みんなと同樣に貧乏だつた、がダントンはベルギーに行つてオルレアン大公から五百萬フラン金貨を貰つたのだ。

聲々

――オー・オー・オー！

赤帽子の市民　政府は呪ふ可き獨乙人等の貴重品やダイヤモンドの保管を司法大臣であるダントンに委ねた。俺は尋ねる、その財寶は何處にあるのだ？

黒帽子の市民　アリー・アントアネットのダイヤモンドはスペインに送られ、黄金はイギリス人に

賣却されて仕舞つてゐる、ダントンは金持ちだ。ダントンは黄金で埋つてゐる。

聲々

——オー・オー・オー！

赤帽子の市民　市民諸君、君達は知つてゐるか、民衆の眞實の友、ロベスピエールは如何なる生活をしてゐるか、といふ事を？彼は五年の間、新しいフロックを縫はなかつた彼は二枚しかシャツを持つて居ない、——しかもそ、は補布だらけだ。俺は或る女の市民が彼にハンケチを渡した時の事をこの眼で見た。ロベスピエールは憤然として馬鹿女の面に、そのハンケチを投げつけて云つた。「フランスの民衆が飢えを癒やすに足るだけのパンを持たないをり、贅澤なものは持たないであらう。」ダントンはこうした人間をさへも非難し、ギロチンの刄の露にしやうと欲して居るのだ。

黒帽子の市民　ロベスピエール萬歳。

——聲々ロベスピエール萬歳！

——清廉なるロベスピエール萬歳！

——民衆の友萬歳！

赤帽子の市民　ダントンを殺せ！

聲々

ダントンをやつつけろ！

——ダントンを殺せ、ダントンを！

——幕——

第十一場

牢獄、圓天井の邊り。舞臺奥に窓。ダントン、カミーユ、ラクロア、フイリツポ、及びイエローが寢臺の上に横になつてゐる。中央に――机、喰ひ殘しの食物が乘つてゐる。監守が燈火を待つて登場。

監守　死ぬ間際には、鱈ふく喰つたり飲んだりする奴があるかと思へば、何一つも飲みも喰ひもしない奴もある。さうかと思ふと又爪の垢程の滿足もなしに酒を飲む奴もある。夜が明ければ自分の首が籠の中に轉り込むのだといふ事を思ひ浮べる――と胸がむかついて來て、男の腑の消が止つて仕舞ふんだ。（堤と皿を見る。）こいつあ悉つかり平らげて仕舞ひやがつた、酒もみんな飲んで仕舞つた。牢守りのお下りは無いぢあないか、畜生めら。腹を空かせて居たつて、豚肉を腹一杯つめ込んだつて、首をチョン斬られる分には變り無からうぢあないか。（燈火で寢臺飯床を照らし、指で勘へる。）一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。

――（チエロー頭をもたげる。）

イエロー　誰だ？

監守　未だ何處かに隱してあるかも知れないな、堤が？

イエロー　お前だつたのか、ディオゴン探して御覽よ、探して……

監守　何處に隱したんだね？

イエロー　遠く、しかも底深く隱されてゐるよ、そして明日になれば永久に姿を消して仕舞ふのだ。

監守　お前の話してるのは何の事だい？

イエロー　人間の事だよ、ディオゴン、人間の

監守　チンコロの喉め、俺が云つてるのは堤の事だよ。

イエロー　俺達は最後の一滴までも飲んで仕舞つた、そして肩の上にあるかないか判らない位の輕い首をして、饗宴の席から立去るのだ。

監守　まあ、好いから寢るんだ、寢るんだ、惡魔の子供め（遠くで時計の響きが聞える。）三時か、もう直きお前達を連れに來るよ。（自分の後の扉に錠を下ろし立去る。）

ラクロア　腹がはち切れさうだ。

イエロー　寢なかつたのか、まだ？

ラクロア　此處にはとてつも無く蟲けらが居やがる。全く堪らん！

イエロー　明日から違つた蟲けらに喰はれるんだよ、俺達は。

ラクロア　蛆蟲か、さうだ。

（窓に月が現れ、牢獄はその光りで照らされる。）

イエロー　俺達は神秘の船の甲板に登つたのだ。帆はもう下ろされてゐる。見ろ、――この空色の波の上を飛んで行くのだ。故國の大地は霧に閉され遠去つて行く。それは避け難い事だ、そして心から悲しむ可き事だ。だからと云つて何が出來るのだ。俺達はほんの一寸の間この美しい遊星を訪れるのに過ぎない。

ラクロア　俺の怖れるものは死ではなくして、苦痛だ。ギロチンの刄が首を斷ち斬るその瞬間は――一秒間の百分の一ほどの間だが鈍刀に掛るやうな苦しさだ。その上は、永遠の樣に長いつて云ふ話しだどんなに幸福だらうなあ――毒を手に入れる事が出來たら。

フイリボー　默つて呉れ、俺は眠り度いんだ。

イエロー　子供の時、俺はよくこんな夢を見た。幻の樣な船に乘つて、月の光の中を漕いで行くんだ。

フイリボー　あゝ、蟲けらから逃れる事が出來たらなあ！

ラクロア　あゝ堪らない！

フイリボー　共和國、それは肉屋に過ぎない。俺達は取除かれて仕舞ふ、結構なりだ併し誰が殘るといふのだ？指導者を失つた民衆、首のない國家、腹だけなのだ。俺達の處刑に一抹の常識の影なりとあればよいのだが。目的の無いと云ふ事は堪らない事だ。ロベスピエールがあと二月か三月生き永へる、が奴も亦双の露と消え果てるだらう、國家の花と云ふ花、民衆の天才といふ天才は切去られた。革命は渾沌たる中から民衆の天才を呼び招いた、が今はその天才が追ひやられやうとしてゐるのだ。

ラクロア　何も云ふな、今となつてはおんなじ事ぢあ無いか、――もう遲い、もう遲い。

イエロー　こうする事だけがいゝんだ。向ふに行つたらお互に默つて居やう。さうすれば死と和睦する事が出來る。演說一つしない事だ。旗一本振らない事だ。命令一つ出さない事だ。靜かに、溫和しく。ラクロア、蒲團を引張らないで呉れ。酷く冷い風が吹いて來る。何處からだか知らないが――。朝迄に鼻をつまらせ度くはないからな。

（カミーユ寢臺から下り、窓邊に赴き、窓闕の上で手紙を書く。）

フイリボー　俺達はもう五年もの間奈落の底へ向つて薄氷の上を歩いてゐた。一秒たりとも止りはしない。何といふ下らぬものだ。人間て奴はまるで風に吹きとばされる塵の樣に下らぬもの

だ。

ラクロア　首斬役人が近よつて來て、畜生でも捉へるやうに君に飛掛る……「正義は行はれた！」あゝ堪らない。

ダントン　奴等に俺の首をはねる元氣があるといふのかーそんな元氣もあるまいて！

（寢臺から立上つて、端から端へと歩き廻る、）ラクロア、君にはこの事が心から判るかい？

ラクロア　胸がむかついて堪らん。餘り喰ひ過ぎたんで、喰物が胃の中で塊つてゐるんだ。

イエロー　奇術師と曲藝師と競馬の騎手とは出演する前には決して澤山ものを喰はないよ。腹がだぶ〳〵してゐると重くつて、本當の離れ業がやり難いんだ、

フイリポー　離れ業！最初の中は地面を歩く練習から始めなければならない、それなのにフランスは突つつけに跳躍をして死んで仕舞つた。

ダントン　俺は生きて居なくなる！明日からフランスはダストンが居なくなる！だが、奴等の中で、如何に國家を治めなければならないか等といふ事を知つてゐる奴は一人も居はしない。イギリスはどんなに狂喜する事だらう。フランス人は氣が違つたのだ！といつて……。

扉の鐵椅子を提り、搖ぶる。）フランス人は氣が違つたのだ！おゝ、フランス人よ！革命は氣が違

つたのだ！

隣りの監房からの聲　人の寢る邪魔をしないで呉れ。

イエロー（釣床寢臺から飛起き　待て、ダントン。向ふで誰かが叱つて居るぞ、壁の向ふで。何だ？壁の向ふの聲　人の寢る邪魔をしないで呉れ。

エロー　あゝあ奴だ！ありやアンドレシエーネの聲だ！

フイリポー　そんな事があるものか！アンドレー、シユニエだ投獄されてゐるんだつて？

ダントン　ロベスピエールはもうずつと以前にシユニエを問罪狀の中に書込んで置いた。で先週の晩、ブレンウイル・ホテルの傍で逮捕されたんだ。奴等め！ヴオルテールでもルソーでも逮捕するがよい。當り前の人間を死刑にする、——舊臭い、退屈な事だ。彼等を何十人となく一團りにして石灰の穴の中に投げ込むがよい、だが國家的天才の首を斷頭臺に曝す、——おゝそんな贅澤を許し得る民族は澤山ありはしない。明日は、明日はパリーの人々に取つて樂しい日だ。考へても見て呉れ、カフエーで御神酒を傾け乍ら、どんな風に感想を語り合ふ事だらう貴君は御覽になりましたかね、ダントンが斷頭臺に登つた時の樣子を、素晴らしい格好でした。房々とした鬘を投げ棄て、廣場を眺め廻し忌々しげに澁面を作つて、さて横になる、と——グ

サツ！丸い球が肩から轉げ落ちましたよ。

エロー　中でも御婦人の滿足振りと來たら大したものだらう。明日の晩はみんなが君の夢を見るぜ。明日の晩は何十萬といふパリーの若い女達が君の影と御亭主とを取替へつこするだらうさ、一晩に十萬人の色女か、――悪くはないな、ダントン。（指をならす。）

ラクロア　シツ！……待つて呉れ……（時計が鳴る。）

フイリポー　三時半だ。

ダントン　車から出て斷頭臺に向ふ。目の前に二本の柱、その間に丸い穴の開いた板、この穴に首を差込まれなければならないのだ。三十五年の間、俺は生きて來た、繼もした、樂しみもした、世界を震愕させもした、俺は總べてのものゝ上に登つた。が何のために――最後の努力に據てこの首を俺は頸元よりも廣からぬその穴の中に差込むがために外ならないのだ。生命から虚無に向ふ門だ！革命つて奴はやるほどの値打があつただらうか。人間を創造するなんて、そんな値打があるだらうか？この愚かしい世界を創造するなんて、そんな値打があるだらうか？

イエロー　どうせこんな事になるとは思つてゐた。だが俺の身體からは一握りの黒土が殘るだらう、そしてその上にあざみの花が咲き出るだらう。

カミーユ（窓邊で）　リユシー、リユシー、俺の可愛いリユシー。（頭を手紙の紙片の上に俯し、泣く）

イエロー　うん、とう〳〵涙つぽくなつて仕舞つた。（枕の下から本を取出し、それを開いて讀書に耽る。）

ダントン（靜かに）　悪黨奴等、悪黨奴ら！

ラクロア　死んだ後でどうなるのか判つたらなあ！

フイリポー　馬鹿々々しい夢だ、譫言だ狂氣だ！

ダントン　死んだ後でどうなるのか、だつて？下らぬ事だ。兎に角、俺は生活を上手に利用した地上に多くの騒亂を卷き起しもした、酒を澤山飲みもした。さうだ、潮時を見計つて立去るのも悧功であるかも知れない。（カミーユの側に行く。）泣く事はない。手紙を書いてゐるのか、リユシーに？俺は近頃一度も妻の事を想出した事が無い。可愛いさうに、彼女は姙娠してゐる。泣かないで、讀んで聽かせて呉れ。

カミーユ（讀む。）　有難い夢が俺の苦しみを縮めて呉れたのだ。大空が俺の頭上で壓縮められた。リユシー、俺はお前の夢を見た。俺はお前の手、お前の唇、お前の泣き濡れた顏に接吻した。呻き聲に目覺めて見れば――あゝ、再び獄屋の中だ、窓には冷やかな月が輝いてゐる、おゝ何

といふ冷やかさだ、あの月は！何といふ冷やかさだ！リユシーよ、お前は何處に居るのだ、リユシー！（泣き伏す。）

ダントン　うむ、うむ。

カミーユ　お願ひだ、――明日、俺が連れて行かれるのを見たら、默つてゐて呉れ、俺の心臟を引裂かないで呉れ、何も叫ばないで呉れ、齒を喰緊つてゐて呉れ、お前は赤ん坊のために生きてゐなければいけない。坊やに俺の話しをしておやり。お父さんは偉大な幸福を望んで居たんだと云ふ事を話しておやり。俺は全世界に崇拜されるやうな共和國を望んでゐたのだ。リユシー、俺は死んで行く。俺は信じてゐる、神の存在する事を、この俺の愛、俺の悶えに免じて。神樣は俺を許して下さるだらう。俺は信じてゐる、リユシー、あの世でお前に會へるであらうといふ事を。吾が生命、吾が喜び、吾が神よ、さらば。吾がリユシーよ、吾がいとしのリユシーよ、さうば。俺は生命の岸邊の遠退つて行くのを感じる、だが俺の結ばれた兩手は未だお前を抱き擁めるであらう、そして胴を離れた俺の首はその搔き曇つた眼をお前から離さないであらう。リユシー！

ダントン　もう酒は殘つて無いか？

（扉を强く叩く音。）

ラクロア　誰だらう？首斬役人だ。

ダントン　俺達を連れに來たのだ、訣を告げよう。御氣嫌よう、カミーユ、男らしくしろよ。

イエロー（本をパタンと閉めて。）　出發の時間だ。

（扉が開き、燈火を持つた典獄、數名の兵士、及び死刑執行人が現れる。）

――幕――

第十二場

雨の朝。廣場の一部。見物人達の群れ壁際に、黑いショールで頭を覆つたリユシーが立つてゐる。彼女の足下には——ルイズがその勝の中に頭を陰してゐる。舞臺奥に——ギロチンの櫓にシモンが現はれる

シモン　來るぞ、來るぞ。

（群衆の間に動搖、ひそ〳〵聲、ルイズは激しく立上り、覗める。リユシーは再び彼女の頭を自分の胸に抱き緊める。近づいて來る車輪の響きが聞える。ジヤンナとロザリーが駈けて來る。何處かでカルマンオールを歌ひ出すが、それも直ぐに止んで仕舞ふ。）

シモン　市民諸君、正義が行はれる。革命の敵は首を斬られるのだ。この瞬間を心に止めて置いて呉れ、全世界の眼はこの瞬間。彼處に注がれてゐる。（所歌臺を指さす。）輝く刄のある、あの二本の柱に注がれてゐる。諸君は知つてゐるか、——あの二本の柱と刄とは何を意味するかを？あれこそ歴史の苛酷な歴史だ。あれこそ時代の復讐者、人類の天才だ。あの機械は炎の天使のやうにフランスの民衆をば不死の榮譽に導かんがために、無から現れ出た。あれは單純なしかも恐ろしい姿をしてゐる、二本の柱と刄。……見てくれ。よく見てやれ。あれは美しい。あれからは目も眩む許りの光りが發してゐる。諸君、餘り永く見詰めて居れば、目が眩むかも知れ

ない。あの床からは牛乳と峰蜜が流れ出てゐる。あの踏臺には燒パンが出來てゐる。あれは黄金の上に立つてゐる、山と積んだ黄金の上に立つてゐる。あの光りは太陽の樣だ。

（車輪の響きが近づく。）

ジヤンナ　來るわ來るわ。

ロザリー　怖いわ、妾、行きませうよ。

ジヤンナ　お默り。ほら、御覽よ、——皆んなが居るわ。

（判決を受けたもの達の車が現れる。——全部兩手を脊中で結ばれてゐる。車は默した儘道を開けた民衆の間を通つて斷頭臺に近づく。鋭劍をつけた兵卒がその廻りを圍む。リユシーは默つて車の方に兩手を差伸べる。）

ジヤンナ　御氣嫌よう。ダントン、

（ロザリーは大聲で泣く。ダントンが最初に車から斷頭臺に向ひ、死刑執行人を押しやる。）

ダントン　フランス人よ、俺は俺の榮譽を置土産にしやう。おい、首斬役人、俺の首をちやんと民衆に見せてやつて呉れ、それだけの値打はあるんだ。

（太鼓が急しく響き渡る。聲々は騷ぎ、判決を受けたもの達は車から斷頭臺に向ふ。カミーユは群衆の間にリユシーを探して、兩手を差伸べる。刄のこもつた音。太鼓の響き。）

——幕——

昭和四年十二月十六日　印刷
昭和四年十二月十八日　發行

ロシヤ農奴戲曲集
奥付

（定價壹圓）

翻譯者　杉本良吉
東京市小石川區小日向臺町一ノ五一
發行者　難波孝夫
東京市神田區表猿樂町一二
印刷者　八木原重三郎

組版　金文社印刷所
印刷　道友社印刷所
製本　小菅製本所
表紙　昭文社石版所

發行所　マルクス書房
東京市小石川區小日向臺町一ノ五一
振替東京一三九八三

勞農ロシヤ文學叢書

全十卷各三百五十頁乃至五百頁
上製美本傑作揃

第一 ウエレサーエフ作 松崎啓次譯 袋街 定價壹圓五拾錢 送料十二錢

第二 リベヂンスキイ作 黑田辰男譯 コムミサール 定價一圓六十錢 送料十二錢

第三 杉本良吉譯 勞農ロシヤ戲曲集 定價壹圓 送料十錢

第四 フルマーノフ作 小宮山明敏譯 叛乱（一圓の豫定） 近刊

第五 リヤーシユコ作 村田春海譯 溶鑛爐 續刊

第六 藏原惟人譯 勞農ロシヤ短篇集「ダイールの陷落」 續刊

第七 イワーノフ作 黑田辰男譯 園田時子譯 パルチザン その他 同

第八 レオーノフ作 岡津秀虎譯 あなぐま 同

第九 グラトコフ作 井田孝平譯 炎の馬 同

第十 グラトコフ作 黑田辰男譯 セメント 同

596
46

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black